一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査

# 四條畷小学校内遺跡・中野遺跡
# 発掘調査概要報告書

2000年3月

四條畷市教育委員会

1．四條畷小学校内遺跡遠景（西から）

2．四條畷小学校内遺跡遠景（南から）

1．B・C地区　全　景（南から）

2．D　地　区　全　景（東から）

巻頭図版3　四條畷小学校内遺跡　出土遺物

1．東側地区　全　景（東から）

2．西側地区　全　景（西から）

巻頭図版5　中野遺跡出土遺物

一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査

# 四條畷小学校内遺跡・中野遺跡

# 発掘調査概要報告書

2000年3月

四條畷市教育委員会

# 例　言

1　本書は、平成６年度と平成８年度に実施した一般国道163号（清滝道路）の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2　平成６年度事業は、建設省近畿地方建設局大阪国道工事事務所、平成８年度事業は、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所から委託を受け、四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。

3　発掘調査は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館（現在四條畷市教育委員会文化振興部生涯学習推進室）技術職員 村上 始を担当者とし実施した。

調査にあたっては、同主任 野島 稔の指導を得た。

4　発掘調査の実施にあたっては、建設省近畿地方建設局大阪国道工事事務所・建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所・地元自治会の御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

5　調査補助については大塚 小百合・岡田 恵子が、出土遺物の整理・実測については村上 始・佐野 喜美・一山 芳枝・萬谷 満子・市来 恵・田中 美鈴・小川 智恵子・駒田 佳子・佐野 三佐子・田伏 美智代・斎藤 佐智子・井上 大輔が行なった。

6　本書の作成にあたっては、大阪府教育委員会 佐久間 貴士氏よりご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

7　本書の執筆は村上 始が行なった。

8　発掘調査において出土した遺物および写真・実測図面等は四條畷市教育委員会に保管している。

# 凡　例

1　本書中のレベルは、T. P.（東京湾平均海面）を用いている。

2　本書中の座標は、kmを単位とする。

3　方位は国土平面直角座標第Ⅵ系の座標北を示す。

4　土色および遺物の色調は、1994年度版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

# 本文目次

巻頭図版
例言・凡例
第1章　遺跡の位置と歴史的環境……1
第2章　調査に至る経過……3
第3章　四條畷小学校内遺跡の調査成果……6
　第1節　基本層序……7
　第2節　遺　構……17
　第3節　出土遺物……35
　第4節　まとめ……57
　遺物観察表……59
第4章　中野遺跡の調査成果……69
　第1節　基本層序……70
　第2節　遺　構……73
　第3節　出土遺物……77
　第4節　まとめ……82
　遺物観察表……83
図版
報告書抄録

# 挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図……5
**四條畷小学校内遺跡**
第2図　位置図……6
第3図　配置図……6
第4図　調査地区壁断面図（A地区・B地区）…9～10
第5図　調査地区壁断面図（C地区・D地区）…11～12
第6図　土坑1遺物出土状況図・断面図……18

第７図　Ａ地区遺構平面図……18
第８図　遺構平面図（Ｂ～Ｄ地区）第２遺構面…19～20
第９図　井戸１出土状況図……23
第10図　第３遺構面平面図（Ｂ・Ｃ地区）……25
第11図　遺物出土状況図……25
第12図　遺物出土状況図……26
第13図　遺物出土状況図(古墳周溝内及び周辺)…27
第14図　遺構平面図（Ｄ地区）……29
第15図　溝８遺物出土状況図……30
第16図　土坑54遺物出土状況図・断面図……30
第17図　遺物出土状況図……33
第18図　包含層出土遺物……36
第19図　包含層出土遺物……39
第20図　出土遺物（Ａ地区）……41
第21図　第２遺構面出土遺物（Ｂ・Ｃ地区）……43
第22図　第３遺構面出土遺物（Ｂ・Ｃ地区）……45
第23図　出土遺物（Ｄ地区）……48
第24図　出土遺物（Ｄ地区）……50
第25図　出土遺物（Ｄ地区）……52
第26図　出土遺物（Ｄ地区）……53
第27図　出土遺物（Ｄ地区）……55

**中野遺跡**

第１図　位置図……69
第２図　配置図……69
第３図　東側地区遺構平面図・壁断面図……72
第４図　土器出土状況図（落ち込み状遺構２）…74
第５図　子持ち勾玉出土状況図……74
第６図　西側地区遺構平面図・壁断面図……76
第７図　出土遺物……78
第８図　出土遺物……81

# 図版目次


巻頭図版1　1 四條畷小学校内遺跡遠景（西から）2 四條畷小学校内遺跡遠景（南から）

巻頭図版2　1 B・C地区全景（南から）　2 D地区全景（東から）

巻頭図版3　四條畷小学校内遺跡出土遺物

巻頭図版4　中野遺跡　1 東側地区全景（東から）2 西側地区全景（西から）

巻頭図版5　中野遺跡出土遺物

**四條畷小学校内遺跡**

図版1　A地区　1 土坑1全景（北から）　2 土坑1遺物出土状況（北から）

図版2　B・C地区　1 第2遺構面検出全景（東から）　2 B・C地区全景（東から）

図版3　B・C地区　1 遺構全景（南東から）　2 遺構全景（東から）

図版4　B・C地区　1 遺構全景（西から）　2 遺構全景（西から）

図版5　C地区　井戸1　1上層　2中層　3下層　4断面

図版6　B・C地区　1 第3遺構面検出全景（東から）　2 遺構全景（東から）

図版7　B・C地区　遺物出土状況　1 落込み状遺構6　2 古墳周溝内及び周辺
3 古墳周溝内

図版8　D地区　1 第1遺構面全景（西から）　2 第2遺構面全景（西から）

図版9　D地区　1 遺構全景（西から）　2 遺構全景（西から）

図版10　D地区　1 遺構全景（西から）　2 旧河川2全景（東から）

図版11　D地区　遺物出土状況　1 土坑54　2 土坑54　3 旧河川1　4 旧河川1

図版12　包含層出土遺物

図版13　包含層出土遺物

図版14　包含層・A地区　出土遺物

図版15　B・C地区　第2遺構面出土遺物

図版16　B・C地区　第3遺構面出土遺物

図版17　B・C地区　第3遺構面出土遺物・D地区　第1遺構面出土遺物

図版18　D地区　第2遺構面出土遺物

図版19　D地区　第2遺構面出土遺物

図版20　D地区　第２遺構面出土遺物
図版21　D地区　第２遺構面出土遺物
図版22　D地区　第２遺構面出土遺物
図版23　D地区　第２遺構面出土遺物

**中野遺跡**

図版１　東側地区　１ 遺構面検出全景（東から）　２ 作業スナップ
図版２　東側地区　１ 遺構全景（西から）　２ 遺構全景（東から）
図版３　東側地区　１ 子持ち勾玉出土状況（東から）
　　２ 子持ち勾玉出土状況（北から）　３ 落込み状遺構２
図版４　西側地区　１ 遺構面検出全景（西から）　２ 遺構全景（西から）
図版５　出土遺物
図版６　出土遺物
図版７　出土遺物

# 第１章　遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、東は奈良県生駒市、西は大阪府寝屋川市、南は大阪府大東市、北は大阪府寝屋川市と交野市に接しており、東西に連なる生駒山系をはさんで西側の平野部と東側の盆地におおきく分けられる。今回報告する四條畷小学校内遺跡は、生駒山系の西側、四條畷市中野・中野２丁目・清滝地内に所在し、東西約150m・南北約200mの範囲が弥生時代から中世にいたる集落跡・古墳の複合遺跡として周知されている。また中野遺跡は、四條畷市中野１～３丁目・中野本町・中野新町地内に所在し、東西約800m・南北約500mの範囲が古墳時代・中世の集落跡として周知されている。

地勢の東半分は花崗岩質よりなる生駒山系の一部で、その西側に大阪層群からなる丘陵と扇状地性の段丘および扇状地が南北に細く広がっており、さらに西側は山地から西流する中小の河川によって形成された沖積平野が広がっている。このうち今回報告する地区は、生駒山系から西流する清滝川と権現川に挟まれた扇状地性の段丘の西端部分に立地している。付近の標高は23～27mを測り、北東から南西に向かって低くなっている。

以下四條畷市内の遺跡について時代をおって概観を述べる。

旧石器時代の遺跡としては、削器・彫器・ナイフ形石器・細石器・礫器などが出土した讃良川川床遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡があげられる。縄文時代の遺跡としては、草創期の有舌尖頭器が出土した南山下遺跡と四條畷小学校内遺跡、早期の米粒文・山形文を施した押型文土器が出土した田原遺跡、中期～晩期の南山下遺跡・砂遺跡・更良岡山遺跡がある。特に更良岡山遺跡からは、高坏形土器・深鉢形土器・注口土器・土製勾玉・土偶・石器・石棒など多量の遺物が出土している。また岡山南遺跡・清滝古墳群・四條畷小学校内遺跡においても石鏃や深鉢形土器などが出土している。

弥生時代の遺跡としては、前期初頭の高さ約70cmの大壺が出土した雁屋遺跡・前期中段階の甕や壺が出土した四條畷小学校内遺跡・前期末の壺が出土した田原遺跡、中期～後期では雁屋遺跡において多くの方形周溝墓や竪穴住居跡を検出し、大量の土器や石器と伴に木製四脚容器・鳥形木製品・舌状石製品などが出土している。特に竪穴住居跡の一軒は火災を受けたもので、炭化した建築部材とともに分銅形土製品が出土している。出土状況から当時の住居の規模を知る上で注目されるものである。

古墳時代前期の古墳としては、全長約90mの前方後円墳で長さ約6.3m・幅約１mの竪穴式石室から石釧・紡錘車・鍬形石・鉄剣・鉄鉾・鉄製斧・鉄製鎌・刀子・鉄鏃などが出

土した忍岡古墳があげられる。中期～後期になると生駒西山麓に清滝古墳群・更良岡山遺跡・大上遺跡・城遺跡などで古墳が造営される。またこの時代は、市内をはじめ当時の河内湖縁辺部にあたるところに多くの集落が営まれるようになる。堅魚木を持つ切妻造りの家形埴輪とともに木製下駄が出土した岡山南遺跡、馬形・犬形・水鳥形・鶏形などの動物形埴輪や人物形埴輪・衣蓋形埴輪など大量の埴輪や土器類が集落内の遺構から出土した忍ヶ丘駅前遺跡・南山下遺跡、初期の須恵器や勾玉・臼玉など大量の玉類・紡錘車・製塩土器が出土した中野遺跡、手捏ね土器・人形形土製品・動物形土製品・滑石製品が出土し、周溝内に小型馬が埋葬されていた方形周溝状の祭祀遺構や石敷製塩炉を検出した奈良井遺跡、水田跡や水口祭祀跡を検出した鎌田遺跡、木間池北方遺跡、四條畷小学校内遺跡、城遺跡などがある。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、7世紀後半の土器が一括で出土した土坑や多くの土器・陶硯と伴に7体分の土製馬形が出土した河川や「…万呂」と墨書された土器が出土した井戸を検出した木間池北方遺跡、「大」と墨書された土師器坏が河川から出土した南野遺跡、素弁蓮華文軒丸瓦や土器類が出土した四條畷小学校内遺跡などがある。

寺院跡としては正法寺跡・讃良寺跡があげられる。特に正法寺跡は薬師寺式の伽藍配置であると推定されており、平成5年の大阪府教育委員会による調査で、奈良時代の掘立柱建物と平安時代の基壇建物などを検出し、創建時の素弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦、複弁蓮華文軒丸瓦や均整唐草文軒平瓦などが出土している。また基壇の北東角で検出した土坑内からは10世紀前半の土師器・黒色土器が多く出土し、そのうち底部外面に「正方寺」と墨書された土師器坏が1点含まれていた。

平安時代の遺跡としては、井戸内から底部外面に「高田宅」・「福万宅」と墨書されている黒色土器碗や土師質皿・緑釉陶器皿などが出土した岡山南遺跡、黒色土器と甕を蔵骨器に転用し納めていた土壙を検出した上清滝遺跡などがあげられる。

鎌倉時代から室町時代の遺跡は数多く存在している。四條畷市の清滝街道沿いに所在する上清滝遺跡では「塔の坊」という小字名が残っているところにおいて方形基壇を検出し、その付近の溝からは壽永三年（1184年）銘の題箋軸とともに金箔塗り光背・木製聖観音立像・漆器・箸・下駄・将棋の駒・瓦器碗・白磁・天目茶碗・茶臼・茶釜・砥石・硯などが出土している。また近くから瓦器碗を焼成した窯跡を検出している。坪井遺跡では、鎌倉時代の鍛冶工房跡を検出している。

戦国時代では、三好長慶の居城であった飯盛山城跡があり、田原地区にはその支城であっ

た田原城跡がある。寺口遺跡からは田原城主田原対馬守一族の墓地及び寺跡を検出した。墓地においては常滑の大甕を総供養塔の埋葬施設とした遺構や古瀬戸の水注を蔵骨器に転用した墓などを検出し、副葬品として青磁椅腰香炉や青白磁小壺が出土した。寺跡では、土塀跡などを検出し、多くの土器類や瓦類が出土した。また平瓦には『千光寺』と刻印されたものも出土している。(第1図)

## 第2章　調査に至る経過

四條畷小学校内遺跡は、四條畷市中野・中野2丁目・清滝地内に所在する遺跡である。この遺跡は清滝川と江瀬美川に挟まれた生駒山系から西へのびる段丘上に存在し、昭和39年に四條畷小学校プール建設工事に伴う発掘調査で、韓式土器が発見されたことから、小学校とその周辺地域を含めた東西約140m・南北約210mの範囲が周知遺跡に指定された。その後、小学校校舎増築工事に伴う調査の際、古墳時代後期の須恵器・土師器と北側の台地に所在した白鳳時代創建の正法寺の軒丸瓦も出土している。また、平成4年度の調査で縄文時代の遺構から有舌尖頭器が出土し、平成5年度の調査では弥生時代前期の壺や甕・石器等が出土したことから、当遺跡は縄文時代から中世にいたる集落跡であることが判明し、現在のところ東西約150m・南北約200mの範囲が縄文時代から中世にいたる集落跡・古墳の複合遺跡として周知されている。また中野遺跡は、四條畷市中野1～3丁目・中野本町・中野新町地内に所在する遺跡である。この遺跡は生駒山系から西へのびる段丘の西端から平野部にかけて存在し、現在のところ東西約800m・南北約500mの範囲が古墳時代・中世の集落跡として周知されている。今回報告する地区は、国道163号の北側にあたる部分の四條畷小学校内遺跡と南側にあたる部分の中野遺跡であり、ふたつの地区は近接している。

今回の調査地区の南東側には木間池北方遺跡が隣接しており、過去数次にわたる調査の結果、古墳時代から中世にいたる複合遺跡として周知されている。特に1995年度の調査では、円墳の周溝や奈良時代の土製馬形7体などを検出している。東側には古墳群である大上遺跡、清滝川を挟んで北側の台地上には白鳳時代創建の正法寺跡が存在している。また清滝川沿いには、大阪と奈良を結ぶ清滝街道が市内の中心を東西方向に通じている。

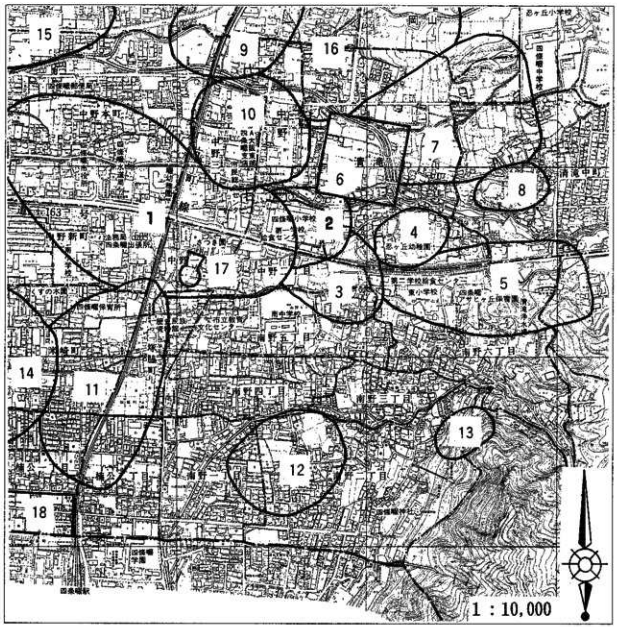
今回調査を行なった中野遺跡の東側で、ガソリンスタンド建設に伴う発掘調査を行なっ

た際には、横穴式石室を検出している。石室は床面のみを残すものであったが、玄室から羨道へ延びる石組みの排水溝を確認している。これら周辺の遺跡の状況と立地条件から、当地域に関しても上記の時代の遺構の存在が十分に考えられた。

以上、中野遺跡については、一般国道163号（清滝道路）拡幅工事を行なうにあたって近畿地方建設局大阪国道工事事務所と協議の結果、工事によって埋蔵文化財が破壊されることから、その記録保存のために事前に発掘調査を行なうこととなった。調査面積は約226㎡で、調査期間は平成６年（1994年）10月３日から11月１日までであった。

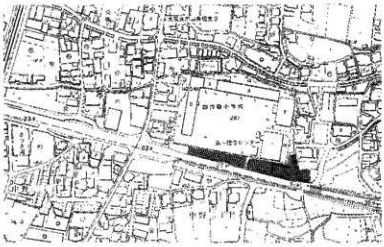
四條畷小学校内遺跡については、一般国道163号（清滝道路）拡幅工事を行なうにあたって近畿地方建設局浪速国道工事事務所と協議の結果、工事によって埋蔵文化財が破壊されることから、その記録保存のために事前に発掘調査を行なうこととなった。調査面積は約1478㎡で、調査期間は平成８年（1996年）８月９日から平成９年（1997年）３月11日までであった。

本書は、平成11年度事業として以上の発掘調査の概要報告を行なったものである。

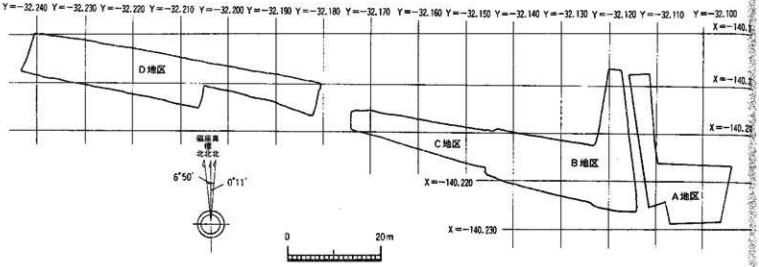



1：中野遺跡
2：四條畷小学校内遺跡
3：木間池北方遺跡
4：大上遺跡
5：城遺跡
6：正法寺跡
7：清滝古墳群
8：国中神社内遺跡
9：南山下遺跡
10：奈良井遺跡
11：南野米崎遺跡
12：南野遺跡
13：近世墓地
14：雁屋遺跡
15：奈良田遺跡
16：岡山南遺跡
17：墓ノ堂古墳
18：楠公遺跡

第1図 周辺遺跡分布図



第2図　位置図




第3図　配置図

## 第3章　四條畷小学校内遺跡の調査成果

今回の発掘調査は、工事によって遺構の破壊が予測される部分の全面発掘調査であり、面積は約1478㎡である。なお調査地区内は、便宜上大きくA・B・C・D地区に分け、それぞれ国土平面直角座標値（第Ⅵ系）を用いて10m四方の区画設定を行なった。それぞれの区画は、その南西にあたる杭のX・Y値をもってその地区の名称とした。

発掘調査は、それぞれ重機で盛り土・旧耕土・床土を掘削した後、堆積土を層位ごとに掘り下げ、各面で遺構の有無を確認しながら進めていった。（第2・3図）

## 第1節　基本層序（第4・5図）

A地区の地表面の標高は、東端でT.P.+29.000m、西端でT.P.+28.500mであり、B地区の地表面の標高は、東端でT.P.+27.400m、西端でT.P.+27.200mであり、C地区の地表面の標高は、東端でT.P.+25.200m、西端でT.P.+24.800mであり、D地区の地表面の標高は、東端でT.P.+26.000m、西端でT.P.+25.800mであった。調査前のA～C地区は、隣接する国道より約3m低い荒地であり、D地区は国道と同じ高さの荒地であった。

以下、確認した基本層序を上層から記載する。

### ★A地区

当地区は、以前建物があった部分と市道の部分である。建物があったところは、大きく撹乱され包含層が削平を受けていたが、一ヶ所遺構が残存していた。

第Ⅰ層　盛土　上面はT.P.+30.200～29.000mで、厚さは20cm～2mである。現代の盛土。

第Ⅱ層　旧耕土　上面はT.P.+28.100～27.000mで、厚さは20～40cmである。現代の耕土。

第Ⅲ層　黄灰色系の砂質土　上面はT.P.+28.000m前後で、厚さは20cm～1mである。近世の包含層。

第Ⅳ層　褐色系の砂質土　上面はT.P.+26.600m前後で、厚さは80cmである。中世の包含層。礫・巨石を含んでいる土層もある。

第Ⅴ層　淡黄色系の粘質土及び砂質土で強くしまっている。北西へ向かうほど低くなっている。地山面である。

### ★B地区

第Ⅰ層　盛土　上面はT.P.+27.200～27.400mで、厚さは20cm～1mである。国道の盛土。

第Ⅱ層　旧耕土　上面はT.P.+26.200～27.000mで、厚さは20cmである。現代の耕土。B地区内で2枚の耕作地を確認した。

第Ⅲ層　床土　上面はT．P．+26.000m前後で、厚さは20cmである。現代の床土。

第Ⅳ層　灰色系の砂質土　上面はT．P．+25.800～27.000m前後で、厚さは20cm～1mである。中世から近世の包含層・遺構面。

第Ⅴ層　灰褐色系の砂質土　上面はT．P．+25.400m前後で、厚さは40cm～1mである。古墳時代から奈良時代の包含層・遺構面。

★C地区

第Ⅰ層　旧耕土　上面はT．P．+25.100mで、厚さは20cmである。現代の耕土。

第Ⅱ層　床土　上面はT．P．+24.800mで、厚さは10cmである。現代の床土。

第Ⅲ層　灰色系の砂質土　上面はT．P．+24.700m前後で、厚さは10～40cmである。中世から近世の包含層・遺構面。

第Ⅳ層　灰褐色系の砂質土　上面はT．P．+24.300～24.600m前後で、厚さは40～80cmである。古墳時代から奈良時代の包含層・遺構面。

★D地区

第Ⅰ層　盛土　上面はT．P．+25.800～26.200mで、厚さは2～2.8mである。国道の盛土。

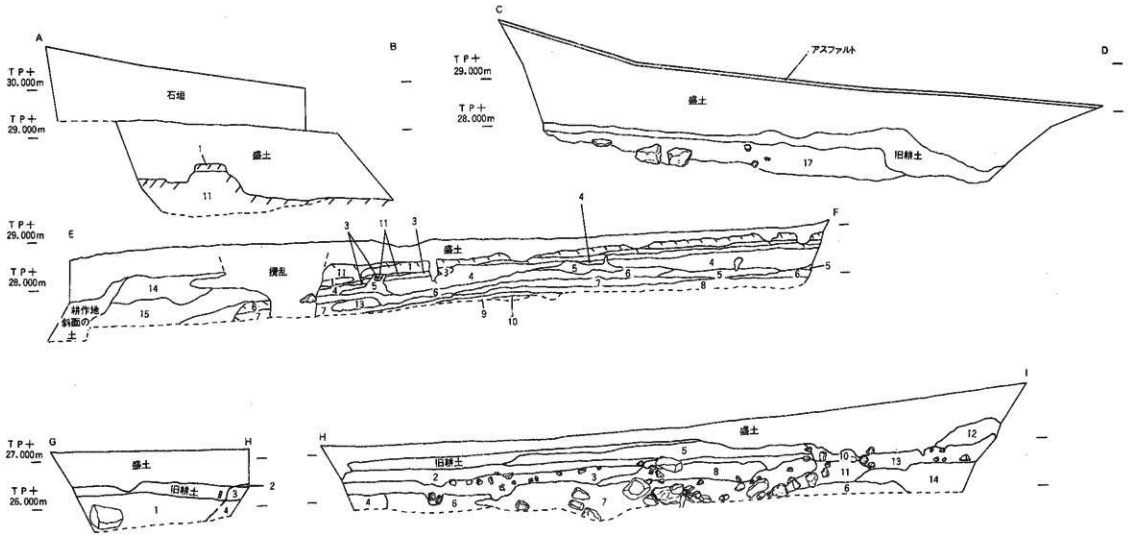
第Ⅱ層　旧耕土　上面はT．P．+23.400～24.000mで、厚さは10～30cmである。現代の耕土。D地区内で2枚の耕作地を確認した。

第Ⅲ層　床土　上面はT．P．+23.400～23.800m前後で、厚さは10～20cmである。現代の床土。

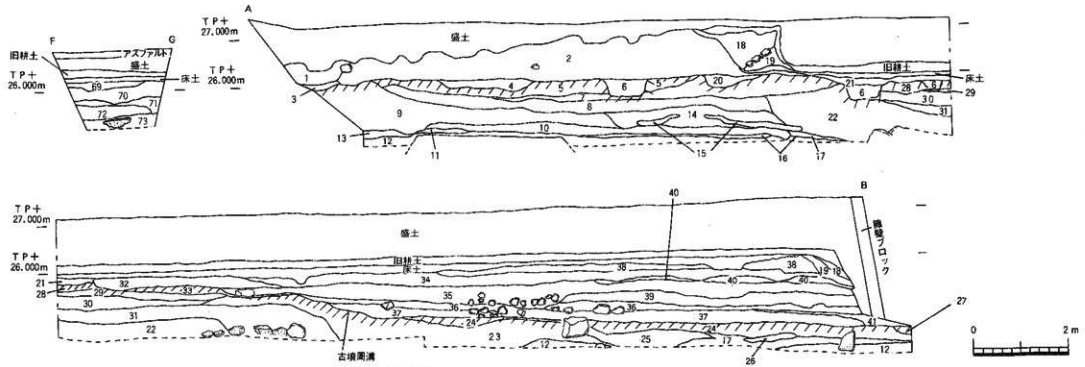
第Ⅳ層　灰色系の砂質土　上面はT．P．+23.300m前後で、厚さは20～40cmである。中世から近世の包含層・遺構面。

第Ⅴ層　灰褐色系の砂質土　上面はT．P．+23.200m前後で、厚さは50cm～1mである。古墳時代から奈良時代の包含層・遺構面。

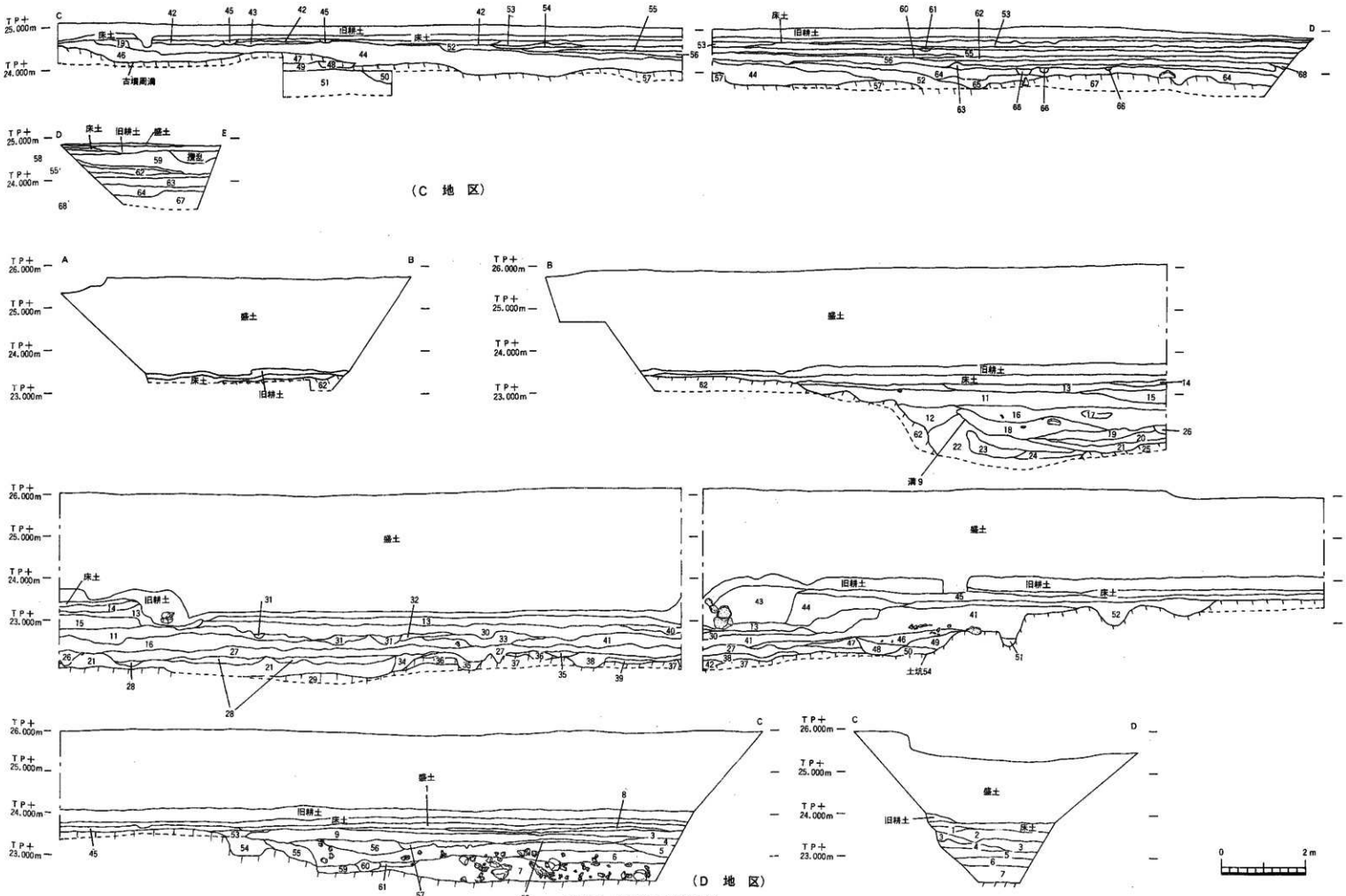
第Ⅵ層　褐灰色砂質土（粗砂を含む）で強くしまっている。地山面である。




（A 地 区）




（B 地 区）　第4図　調査地区壁断面図




第4図 調査地区壁断面図

★A地区（A～F）土層説明

第1層　淡黄色粘質土（2.5Y 8/3）
第2層　灰白色粗砂（2.5Y 8/2）
　　しまりが強い
第3層　暗紫灰色粘質土（5P 3/1）
第4層　淡黄色砂質土（5Y 8/3）
第5層　浅黄色砂質土（5Y 7/4）
第6層　灰白色砂礫（5Y 8/1）
第7層　浅黄色砂質土（5Y 7/3）
第8層　灰白色粗砂（5Y 7/2）
第9層　灰白色粘質土（10Y 7/2）
第10層　浅黄色粗砂（5Y 7/3）
第11層　灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）
　　しまりが強い
第12層　灰黄色シルト（2.5Y 7/2）
　　しまりが強い
第13層　淡黄色砂質土（5Y 8/3）
　　しまりが強い
第14層　灰黄色砂質土（2.5Y 6/2）
第15層　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6/4）
第16層　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6/3）
第17層　黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）

★A地区（G～I）土層説明

第1層　青灰色砂質土（10BG 6/1）
第2層　にぶい黄橙色砂質土（10YR 7/2）
第3層　褐灰色砂質土(10YR 6/1)礫混じり
第4層　灰白色シルト（10YR 7/1）
第5層　明褐色砂質土（7.5YR 5/6）
第6層　明褐色細砂（7.5YR 5/6）
第7層　灰黄褐色粗砂（10YR 5/2）
　　礫・巨石混じり
第8層　灰褐色砂質土（7.5YR 4/2）
　　礫・巨石混じり
第9層　褐灰色砂質土（7.5YR 4/1）
第10層　灰色砂質土（N 6/）
第11層　灰色粘質土（N 6/）
第12層　灰黄色砂質土（2.5Y 7/2）
第13層　にぶい黄橙色砂質土(10YR 6/4)
　　礫混じり
第14層　にぶい黄色粗砂（2.5Y 6/3）

★B・C地区（A～G）　土層説明

第1層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第2層　褐灰色砂質土（5YR 5/1）
第3層　灰黄色砂質土（2.5Y 6/2）
第4層　灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）
第5層　黄色砂質土（2.5Y 8/6）
第6層　黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）
第7層　明黄褐色細砂（2.5Y 7/6）
第8層　灰褐色粗砂（7.5YR 5/2）
第9層　浅黄色砂質土（2.5Y 7/4）
第10層　灰白色粗砂（2.5Y 8/2）
第11層　暗赤灰色粘質土（5R 4/1）
第12層　オリーブ黒色粘質土（5Y 2/2）
第13層　暗青灰色砂質土（5B 4/1）
第14層　灰黄褐色粗砂（10YR 6/2）
第15層　淡黄色シルト（5Y 8/4）
第16層　青灰色粘土（5B 6/1）
第17層　黒褐色粘土（10YR 3/1）
第18層　浅黄色砂質土（2.5Y 7/3）
第19層　黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
第20層　にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/3）
第21層　暗緑灰色砂質土（10GY 4/1）
第22層　灰褐色砂礫（7.5YR 5/2）
第23層　明青灰色シルト（10BG 7/1）
第24層　青灰色シルト（10BG 6/1）
第25層　明青灰色砂質土（5BG 7/1）
第26層　淡黄色砂礫（2.5Y 8/4）
第27層　明緑灰色シルト（5G 7/1）
第28層　淡黄色砂質土（5Y 8/3）
第29層　黄色砂質土（2.5Y 8/6）
第30層　黄色砂質土（2.5Y 8/8）
第31層　淡黄色砂質土（2.5Y 8/3）
　　粗砂混じり
第32層　青灰色砂質土（5B 5/1）
第33層　灰白色砂質土（2.5GY 8/1）
　　シルト混じり
第34層　青灰色砂質土（5B 6/1）
第35層　黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
第36層　褐灰色砂質土（10YR 6/1）
第37層　暗青灰色砂質土（5B 4/1）
第38層　黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
第39層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第40層　明黄褐色砂質土（10YR 6/8）
第41層　灰色砂質土（7.5Y 5/1）
第42層　灰白色砂質土（2.5Y 8/2）
第43層　淡黄色砂質土（2.5Y 8/4）
第44層　にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/3）
第45層　黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）
第46層　暗青灰色粘質土（5B 4/1）
第47層　灰白色シルト（5Y 8/2）
第48層　灰色シルト（N 5/）
第49層　灰白色細砂（N 7/）
第50層　明緑灰色砂質土（10GY 8/1）
第51層　明青灰色砂質土（10BG 7/1）
第52層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第53層　褐灰色砂質土（10YR 4/1）
第54層　灰白色砂質土（2.5Y 7/1）

第55層　明黄褐色砂質土（10YR 6/8）
第56層　褐灰色砂質土（10YR 6/1）
第57層　淡黄色粗砂（2.5Y 8/4）
第58層　橙色砂質土（7.5YR 6/8）
第59層　灰色砂質土（5Y 6/1）
第60層　明黄褐色砂質土（2.5Y 6/8）
第61層　灰白色砂質土（10YR 7/1）
第62層　黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
第63層　黒褐色砂質土（10YR 3/1）
第64層　灰色砂質土（5Y 5/1）
第65層　にぶい黄橙色砂質土（10YR 6/3）
第66層　黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
第67層　灰白色粗砂（2.5Y 7/1）
礫・巨石混じり
第68層　灰白色細砂（5Y 8/1）
第69層　明オリーブ灰色砂質土(5GY 7/1)
第70層　黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
第71層　灰色砂質土（5Y 4/1）
第72層　灰オリーブ色砂質土（5Y 6/2）
第73層　灰白色粗砂（5Y 7/2）
礫・巨石混じり

**★D地区（A～D）　土層説明**

第1層　オリーブ灰色砂質土（2.5GY 6/1）
第2層　灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）
第3層　オリーブ灰色砂質土（2.5GY 6/1）
シルト混じり
第4層　明オリーブ灰色細砂（2.5GY 7/1）
第5層　暗灰色粘土（N 3/）
第6層　黒色砂質土（N 2/）
第7層　灰色砂礫（5Y 5/1）
第8層　明オリーブ灰色砂質土（5GY 7/1）
第9層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第10層　褐灰色砂質土（10YR 4/1）
第11層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第12層　灰黄色砂質土（2.5Y 7/2）
第13層　明オリーブ灰色砂質土(2.5GY 7/1)
第14層　黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
第15層　灰白色砂質土（2.5Y 7/1）
第16層　にぶい黄色砂質土（2.5Y 6/3）
第17層　淡黄色砂質土（2.5Y 8/4）
第18層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第19層　暗青灰色粘質土（5B 4/1）
第20層　暗灰色砂質土（N 3/）
第21層　黒色砂質土（N 2/）
第22層　淡黄色砂質土（5Y 8/4）
第23層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第24層　黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）
第25層　青灰色砂質土（5B 5/1）
砂礫混じり
第26層　灰色砂質土（N 4/）
第27層　黒褐色砂質土（10YR 3/2）
第28層　黒褐色砂質土（10YR 2/2）

第29層　暗青灰色細砂（10BG 4/1）
第30層　褐灰色砂質土（10YR 6/1）
第31層　褐灰色粗砂（10YR 6/1）
第32層　黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
第33層　褐灰色砂質土（5YR 4/1）
第34層　黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）
第35層　褐灰色砂質土（10YR 4/1）
第36層　灰色砂質土（5Y 4/1）
　　粗砂混じり
第37層　褐灰色砂礫（10YR 5/1）
第38層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
第39層　褐灰色砂質土（10YR 6/1）
第40層　黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
第41層　灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）
第42層　暗青灰色粘質土（10BG 4/1）
第43層　灰黄色砂質土（2.5Y 6/2）
第44層　にぶい黄橙色砂質土（10YR 7/3）
第45層　明黄褐色砂質土（10YR 6/8）
第46層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
　　炭化物・焼土混じり
第47層　褐灰色砂質土（10YR 4/1）
第48層　灰黄色細砂（2.5Y 7/2）
第49層　褐灰色砂質土（10YR 6/1）
第50層　青灰色粘質土（10BG 5/1）
第51層　灰色砂質土（5Y 5/1）
第52層　褐灰色砂質土（10YR 5/1）
　　鉄分混じり
第53層　灰色砂質土（N 6/）
第54層　黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
第55層　灰白色細砂（5Y 7/2）
第56層　暗灰黄色砂質土（2.5Y 5/2）
第57層　オリーブ褐色砂質土（2.5Y 4/3）
第58層　灰白色細砂（2.5Y 7/1）
第59層　青灰色粘質土（5B 5/1）
第60層　灰白色粗砂（5Y 8/2）
第61層　にぶい黄色粗砂（2.5Y 6/3）
第62層　褐灰色砂質土（10YR 6/1）
　　しまりが強い

## 第2節　遺　構

### ★A地区（第6～7図・第20図・図版1・図版14）

この地区は今回の調査範囲の東端にあたる。基本層序の項でも述べたとおり、調査前は市道・建築物があったところである。そのため建築物があったところは基礎工事で大きく撹乱を受けており包含層は確認できなかった。したがって機械掘削後は地山面であったが、調査地区のほぼ中央部に2基の遺構が残存していた。

**●土坑1**

この遺構は、X＝－140.230・Y＝－32.110地区において検出した。遺構の東側肩部の標高はT.P.＋28.700m、西側肩部の標高はT.P.＋28.450mを測った。断面図のとおり特に西側肩部は大きく削平を受けている。残存する規模は、直径約2.1m・深さ約40cm。平面形態は、ほぼ円形を呈している。

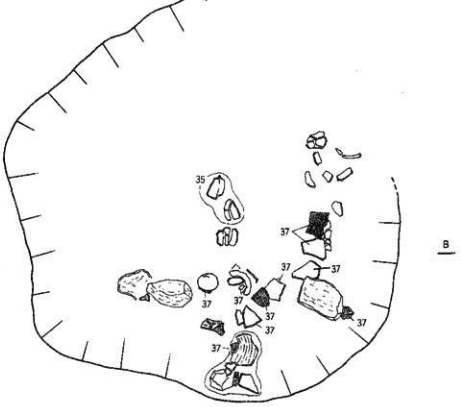
遺物は、須恵器坏身・坏蓋（第20図－35・36・図版14－35・36）・韓式系陶質土器壺（第20図－37・図版14－37）が上層及び下層から出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期前半と考えられる。

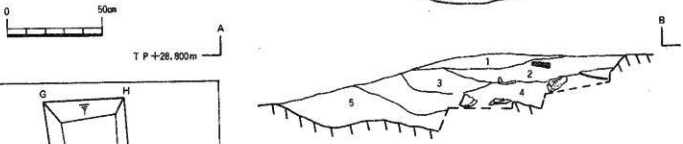
**土坑1土層説明（第6図）**

第1層　灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）　　第2層　暗灰黄色砂質土（2.5Y 5/2）
第3層　黄褐色砂質土（2.5Y 5/3）　　第4層　黒褐色砂質土（10YR 3/2）
第5層　4層に灰白色粘土（5Y 7/2）が混入

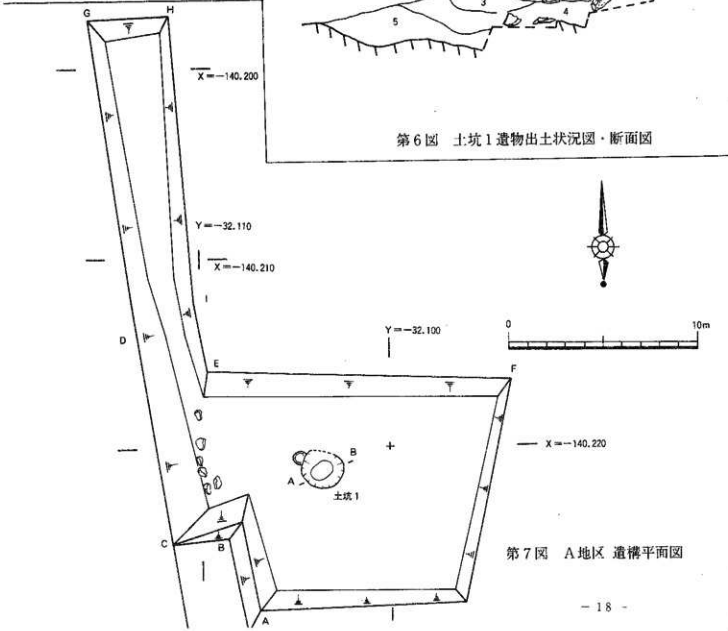
### ★B・C地区（第8図～第13図・第21～22図・図版2～7・図版15～17）

この両地区は今回の調査範囲の中央部にあたる。B地区は、旧耕土面が東端から約11m付近で約80cmの落差をもって西側へ向かって一段低くなっており、さらにC地区との境で約1.2mの落差をもって西側へ向かって一段低くなっている。この状況からB・C地区内は、3枚の耕作地に分かれていたことがわかる。

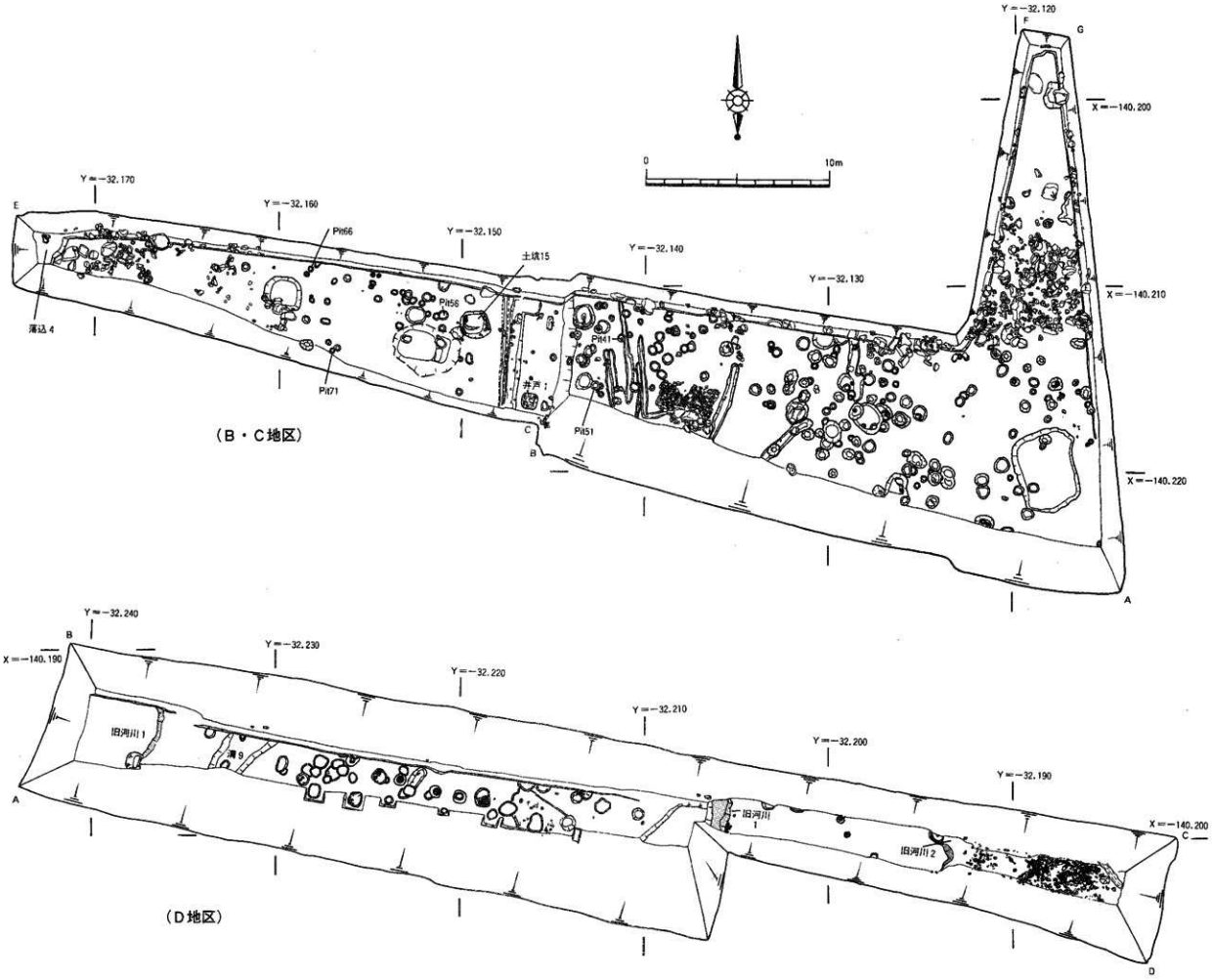



第6図　土坑1遺物出土状況図・断面図




第7図　A地区 遺構平面図




第8図　遺構平面図（B～D地区）第2遺構面

●第１遺構面

機械掘削により盛土・旧耕土・床土を除去した面で、数本の耕作溝を検出した。溝の大半は、南北方向に主軸をおき直線的に掘られている。長さは約５m程度のものがほとんどであるが、途中で消滅しているものが多い。幅は約20～50cm、深さは約２～５cmを測った。遺物は近世の陶磁器片が出土している。

●第２遺構面（第８図～第９図・第21図・図版２～５・図版15）

この遺構面は、B・C地区全域で確認した。検出面の標高は、東端でT.P.＋26.000m付近、西端でT.P.＋24.000m付近であり、約４％の勾配で西へ向かって低くなっている。

この地区においては全体で、Pitと土坑をあわせて183基、溝５本、井戸１基、落ち込み状遺構４基を検出した。しかしほとんどの出土遺物は小片で、図示できる遺物が出土した遺構は以下のとおりである。

Pit56　この遺構は、X＝－140.220・Y＝－32.160地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋24.620mを測った。規模は、直径約50cm・深さ約50cm。平面形態は、ほぼ円形を呈している。

遺物は、土師器皿（第21図－38・図版15－38）などが出土している。皿の内面には油の痕跡がみられ、口縁部には灯心の跡がみられる。当遺構は、出土物から12世紀代と考えられる。

Pit66　この遺構は、X＝－140.210・Y＝－32.160地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋24.290mを測った。規模は、直径約30cm・深さ約15cm。平面形態は、ほぼ円形を呈している。

遺物は、土師器皿（第21図－39・図版15－39）などが出土している。当遺構は、出土遺物から14世紀代と考えられる。

Pit51　この遺構は、X＝－140.220・Y＝－32.150地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋25.110mを測った。規模は、直径約50cm・深さ約11cm。平面形態は、ほぼ円形を呈している。

遺物は、須恵器坏蓋（第21図－40・図版15－40）などが出土している。当遺構は、出土遺物から８世紀前半と考えられる。

Pit41　この遺構は、X＝－140.220・Y＝－32.150地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋25.100mを測った。規模は、直径約40cm・深さ約17cm。平面形態は、ほぼ

円形を呈している。

遺物は、瓦器碗（第21図－41・図版15－41）などが出土している。瓦器碗は、見込み部にジグザグ状の暗文が施されている。当遺構は、出土遺物から11世紀末～12世紀前半と考えられる。

**Pit71**　この遺構は、X＝－140.220・Y＝－32.160地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋24.600mを測った。規模は、直径約25cm・深さ約20cm。平面形態は、ほぼ円形を呈している。

遺物は、瓦器碗（第21図－42・図版15－42）などが出土している。瓦器碗は、外面に丁寧なヘラミガキがなされており、見込み部にはジグザグ状の暗文が施されている。当遺構は、出土遺物から11世紀末～12世紀前半と考えられる。

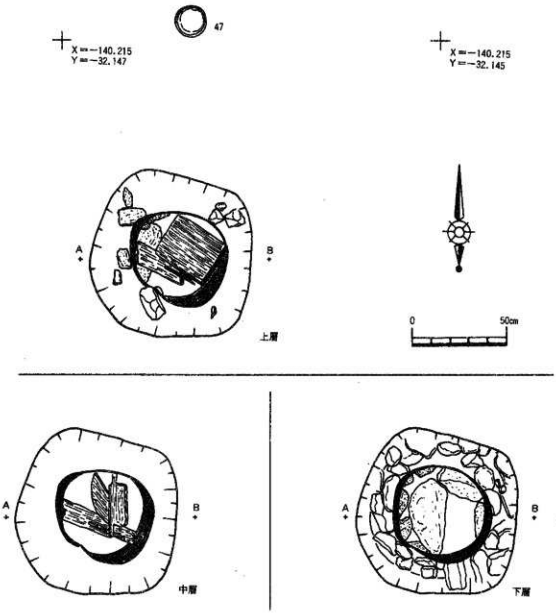
**土坑15**　この遺構は、X＝－140.220・Y＝－32.150地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋24.610mを測った。規模は、一辺約1.3～1.5m・深さ約30cm。平面形態は、隅丸方形を呈している。遺構の東側と西側の肩部から壁面にかけて、花崗岩の自然石が十数個貼りついており、その状況から廃棄された石組みの井戸の可能性がある。

遺物は、土師器碗（第21図－43・44・図版15－43・44）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期と考えておきたい。

**落ち込み4**　この遺構は、X＝－140.210・Y＝－32.180地区において検出した。ただし調査地区の西端にあたるため、検出できたのはその一部分である。検出面の標高は、T.P.＋23.750mを測った。規模は、長さ約1.5m・深さ約20cm。平面形態は、肩部が南北方向にほぼ直線状に延びる。この遺構はC地区の端にあり、南北方向に延びている肩部から西へ向かって低くなっている形態やその堆積土の状況から、D地区で検出した旧河川2の左岸にあたるものと考えられる。その場合、河川の幅は約22.5mである。

遺物は、瓦器碗（第21図－45・図版15－45）などが出土している。瓦器碗は、内外面とも丁寧なヘラミガキがなされており、見込み部にはジグザグ状の暗文が施されている。当遺構は、出土遺物から11世紀末頃と考えられる。

**井戸1**　この遺構は、X＝－140.220・Y＝－32.150地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋24.570mを測った。規模は、一辺約50～60cm・深さ約45cm。平面形態は、隅丸方形を呈している。井戸の掘り方の周囲には、長さ10～30cm大の花崗岩の自然石を3段に積んでおり、底には長さ40cm大の花崗岩の自然石を敷いている。井戸の本体には、直径約50cm・深さ約25cm・厚さ約5㎜の曲物を一段設置している。曲物内の上層からは、長




第９図　井戸１出土状況図（Ｃ地区）

さ約30cm・幅約25cm・厚さ約３cmの長方形の板が出土しており、中層からは、長さ約22cm・幅約８cm・厚さ約２cmの長方形の板のそれぞれの短辺から約５cmの突起が延びているもの、直径約30cm・厚さ約１cmの桶底とも考えられる板の半分、直径約２cm・長さ約20cmの棒状のもの、長さ約45cm・幅約10cm・厚さ約２cmの井戸枠の縦板とも考えられる板が出土している。しかし、これらは断片であり現在のところ用途不明の加工木製品である。（第９図・図版５）

遺物は、白磁碗（第21図－46・図版15－46）などが出土している。当遺構は、出土遺物から12世紀代と考えられる。

●第３遺構面（第10図～第13図・第22図・図版６～７・図版16～17）

この遺構面は、Ｂ地区の一部とＣ地区全域で確認した。検出面の標高は、東端でＴ．Ｐ．＋25.450m付近、西端でＴ．Ｐ．＋24.000m付近である。

この地区においては全体で、Pitと土坑をあわせて42基、落ち込み状遺構２基、古墳の周溝１基を検出した。しかしほとんどの出土遺物は小片で、図示できる遺物が出土した遺構は以下のとおりである。

**土坑24**　この遺構は、Ｘ＝－140.220・Ｙ＝－32.140地区において検出した。検出面の標高は、Ｔ．Ｐ．＋25.100mを測った。規模は、長径約1.9m・短径約1.6m・深さ約16cm。平面形態は、楕円形を呈している。この遺構は、後述する古墳周溝内に掘られたものと考えられる。

遺物は、土師器碗（第22図－48・図版16－48）などが出土している。また調査中において上層から出土していると思われた須恵器甕は、周溝の上層の遺物と考える（第12図－⑦）。遺構の検出状況から当遺構は、古墳時代後期と考えておきたい。

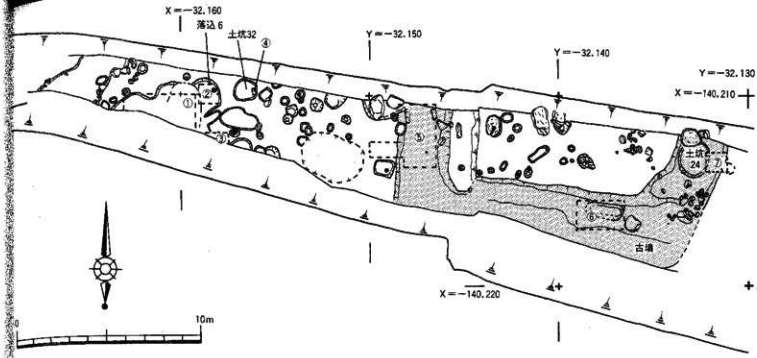
**土坑32**　この遺構は、Ｘ＝－140.220・Ｙ＝－32.160地区において検出した。検出面の標高は、Ｔ．Ｐ．＋24.000mを測った。規模は、一辺約60cm～1m・深さ約12cm。平面形態は、隅丸方形を呈している。

遺物は、須恵器甑（12図－④－49・第22図－49・図版16－49）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期前半と考えられる。

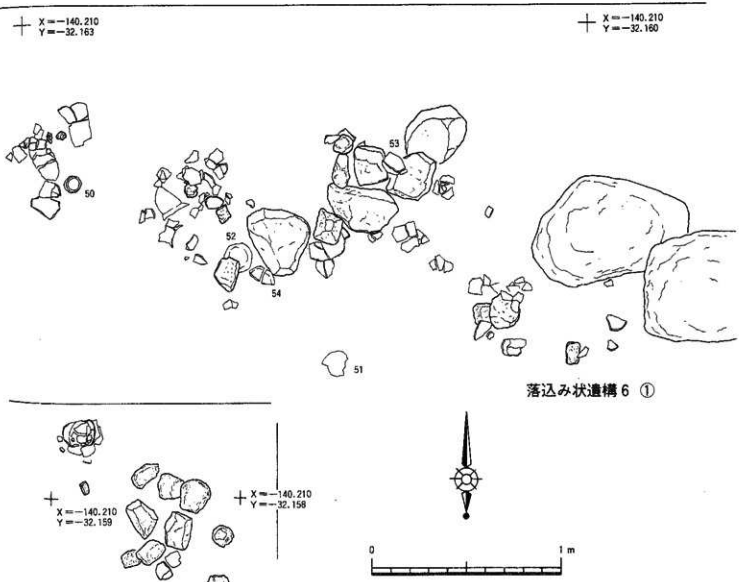
**落ち込み６**　この遺構は、Ｘ＝－140.220・Ｙ＝－32.160～－32.170地区において検出した。検出面の標高は、Ｔ．Ｐ．＋23.980mを測った。規模は、最長約5.4m・最大幅約2.8m・深さ約20cm。平面形態は、不正形である。

遺物は、土師器碗（第11図－①－50・第22図－50・図版７－１・図版16－50）・土師器碗（第11図－①－51・第22図－51・図版７－１・図版16－51）・須恵器坏蓋（第11図－①－52・第22図－52・図版７－１・図版16－52）・須恵器坏身（第11図－①－53・第22図－53・図版７－１・図版16－53）・須恵器坏身（第11図－①－54・第22図－54・図版７－１・図版16－54）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期後半と考えられる。

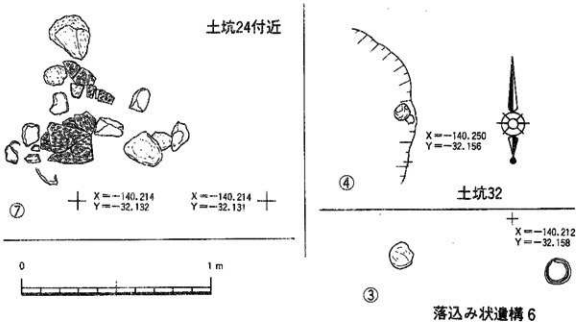
**古墳**　この遺構は、Ｘ＝－140.220・Ｙ＝－32.140～－32.150地区において検出した。検出面の標高は、東側でＴ．Ｐ．＋25.430m、西側でＴ．Ｐ．＋24.280mを測った。今回の調査では、調査地区の幅が狭いため全体を検出することはできなかったが、その「コ」の字




第10図　第３遺構面平面図（Ｂ・Ｃ地区）




第11図　遺物出土状況図

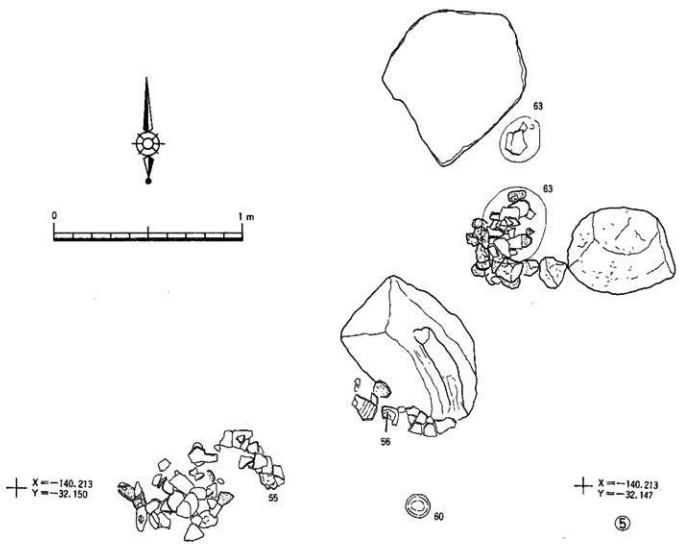



第12図　遺物出土状況図

状に巡る溝の平面形態から方墳の一部ではないかと考える。ただし遺構の大半は、調査地区の北側にある給食センターの敷地内にあたる。規模は、周溝の南側の溝が一辺約15m・幅約３m・深さ約60cm、東側の溝と西側の溝については、長さ約４m・幅約2.8m・深さ約15～60cmであった。

この遺構は、その上面が後世に削平を受けており、特に西側の溝にあたる部分は、近世になって耕作地を造成するために大きく削平されている。そのため溝は、約15cmの深さを残すのみであった。墳丘部にあたる部分についても上記のとおりである。また東側と南側の周溝内には２基の土坑が掘られていた。東側の溝に掘られていた土坑は、前述した土坑24である。南側の溝に掘られていた土坑の検出面の標高は、T．P．+24.800mを測った。規模は、長径約２m・短径約80cm・深さ約20cm。平面形態は、楕円形を呈している。

遺物は、須恵器坏蓋（第13図－⑤－55・第22図－55・図版７－２・図版16－55）・須恵器坏蓋（第13図－⑤－56・第22図－56・図版７－２・図版16－56）・須恵器坏身（第13図－⑥－57・第22図－57・図版７－３・図版16－57）・須恵器坏蓋（第13図－⑥－58・第22図－58・図版７－３・図版17－58）・須恵器坏身（第13図－⑥－59・第22図－59・図版７－３・図版17－59）・須恵器坏身（第13図－⑤－60・第22図－60・図版７－２・図版17－60）・須恵器坏身（第13図－⑥－61・第22図－61・図版７－３・図版17－61）・須恵器坏身（第22図－62・図版17－62）・土師器甕（第13図－⑤－63・第22図－63・図版７－２・図版17－63）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。




第13図　遺物出土状況図（古墳周溝内及周辺）

★D地区（第８図・第14図～第17図・第23～27図・図版８～11・図版17～23）

この地区は今回の調査範囲の西端にあたる。基本層序の項でも述べたとおり、国道163号を新設するために旧耕土の上に約２～2.8mの盛土を行なっている。旧耕土面は、東端から約31m付近で約80cmの落差をもって西側へ向かって一段低くなっており、そこから約14m西へ行った地点で、約90cmの落差をもって西側へ向かって一段高くなっている。

この状況からD地区内は、３枚の耕作地に分かれていたことがわかる。

●第１遺構面（第14図～第15図・第23図・図版８－１・図版17）

この遺構面は、D地区の西側約2/3、すなわちX＝－140.200～－140.210・Y＝－32.210～－32.250地区で確認した。検出面の標高は、東端でT.P.＋22.600m付近、西端でT.P.＋22.500m付近である。

この地区においては全体で、Pitと土坑をあわせて17基、溝１本を検出した。図示できる遺物が出土した遺構は以下のとおりである。

**土坑41**　この遺構は、X＝－140.200・Y＝－32.220地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋22.500mを測った。規模は、長径約70cm・短径約45cm・深さ約10cm。平面形態は、楕円形を呈している。

遺物は、須恵器坏身（第17図－64・第23図－64・図版17－64）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期後半と考えられる。

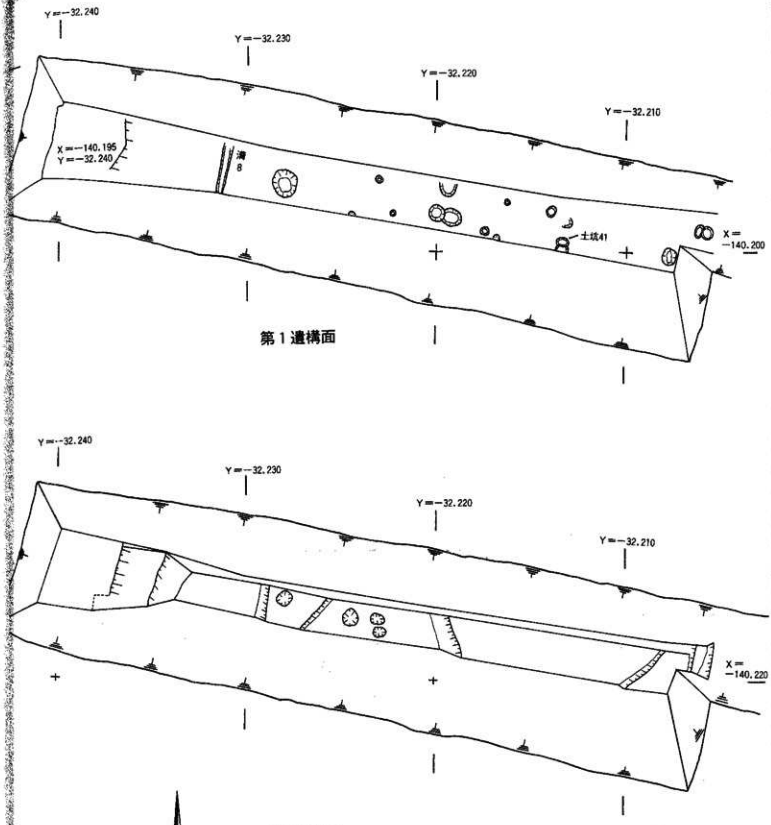
**溝８**　この遺構は、X＝－140.200・Y＝－32.240地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋22.460mを測った。規模は、長さ約2.7m・幅約40cm・深さ約10cm。平面形態は、南北方向に主軸をおく直線状を呈し、断面形態はU字状を呈しており、底盤は北から南へ低くなっている。溝の北東側の肩部から遺物が２点出土している。（第15図）

遺物は、須恵器坏身（第15図－65・第23図－65・図版17－65）・韓式系甕（第15図－66・第23図－66・図版17－66）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期前半と考えられる。

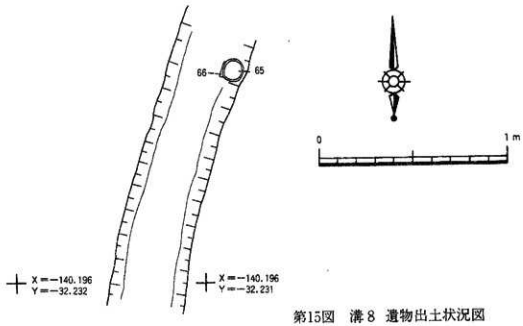
●第２遺構面（第８図・第16～17図・第23～27図・図版８－２～11・図版18～23）

この遺構面は、D地区全域で確認した。検出面の標高は、東側でT.P.＋23.400m付近、西端でT.P.＋23.300m付近であった。

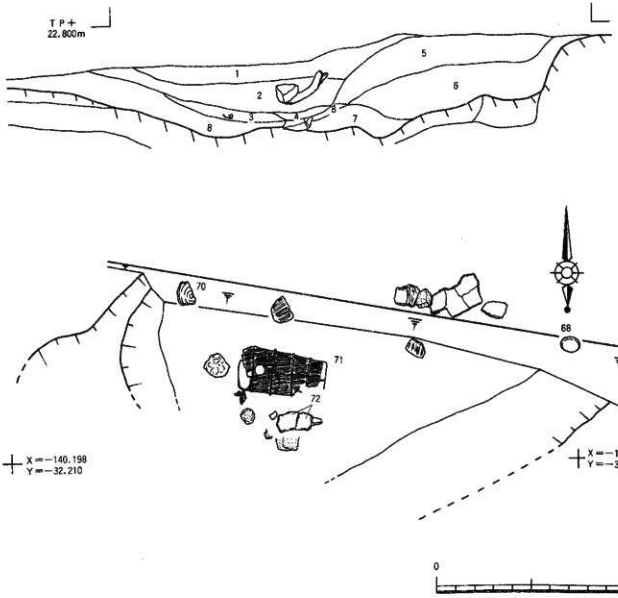
この地区においては全体で、Pitと土坑をあわせて48基、溝１本、落ち込み状遺構１基、旧河川２本を検出した。しかしほとんどの出土遺物は小片で、図示できる遺物が出土した




第14図　遺構平面図（D地区）




第15図　溝8　遺物出土状況図




第16図　土坑54 遺物出土状況図・断面図

遺構は以下のとおりである。

**溝9**　この遺構は、X＝－140.200・Y＝－32.240地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋21.150～T.P.＋22.300mを測った。規模は、長さ約2m・幅約1.8～2.7m・深さ約40cm。平面形態は、北東－南西方向に主軸をおくほぼ直線状を呈し、断面形態はU字状を呈しており、底盤は北から南へ低くなっている。東側の溝の肩部は西側に比べると約1.2m低い地点で検出した。また溝の幅は、北側に比べると約90cm南側が狭くなっている。

遺物は、須恵器坏身（第23図－67・図版18－67）が溝の上層（第5図－第18層）より出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期後半と考えられる。

**土坑54**　この遺構は、X＝－140.200・Y＝－32.210地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋22.500～T.P.＋22.700mを測った。規模は、長さ約60cm・幅約2.5m・深さ約50cmであった。この遺構は遺構面の検出精査では確認できず、側溝を掘り下げている際に断面観察で確認できたため、調査中に遺構の南側を破壊する間違いを犯した。そのため北側の壁面を拡幅し遺構の一部を再確認した。以上のことから平面形態は不明である。ただし、図面整理をしていく段階で、掘り下げてしまった遺構面において検出した直線的な浅い落ち込みのラインが、この遺構の東側の肩部の続きとほぼ一致することがわかった。このことが正しいと考えるとこの遺構は土坑ではなく溝の可能性がある。（第16図）

遺物は、土師器碗（第16図－68・第23図－68・図版11－1・図版18－68）・土師器碗（第23図－69・図版11－1・図版18－69）・須恵器坏身（第16図－70・第23図－70・図版11－1・図版18－70）・円筒埴輪（第16図－71・第23図－71・図版11－1・2・図版18－71）・移動式竈（第16図－72・第23図－72・図版11－1・2・図版18－72）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

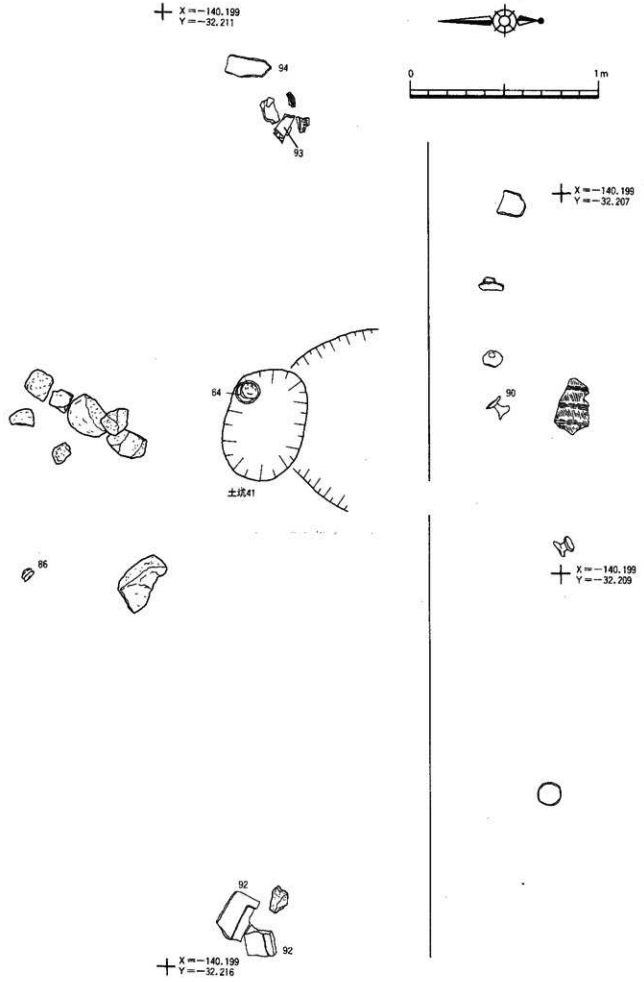
**土坑54土層説明（第16図）**

第1層　灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）炭化物・焼土を少量含む
第2層　灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）炭化物・焼土を多量含む
第3層　灰色粘質土（N 5/）
第4層　灰白色シルト（7.5Y 8/2）
第5層　灰黄褐色砂質土（10YR 5/2）
第6層　5層に淡黄色砂質土（2.5Y 8/4）ブロック混入
第7層　灰色砂質土（N 6/）
第8層　7層に灰白色シルト（N 8/）混入、炭化物を少量含む

旧河川１　この遺構は、Ｘ＝－140.200・Ｙ＝－32.210～－32.250地区において検出した。検出面の標高は、東側でＴ．Ｐ．＋23.200m、西側でＴ．Ｐ．＋23.300mを測った。この河川は調査地区のほぼ中央から西寄りにあり、規模は、長さ約３m・幅約31.5m・深さ約1.2～２mであった。ただし、河川の底盤は次の第３遺構面で確認した。また河川の両岸は地山面からの掘り込みであり、この第２遺構面の遺構は、河川が埋まった段階で掘られたものである。平面形態は、北東－南西方向に主軸をおくものであるが、調査地区の南北方向の幅が狭いため詳細は不明である。ただし、国道163号を挟んだ南向かい側を1995年度に調査した際に、今回の旧河川の調査で確認した埋土と同じような土層を確認していることや調査中に大量の湧き水があったことから推察すると、この河川はその方向に向かって延びているものと考えられる。

遺物は、上層より須恵器坏蓋（第24図－73・図版19－73）・須恵器坏蓋（第24図－74・図版19－74）・須恵器坏蓋（第24図－75・図版19－75）・須恵器坏身（第24図－76・図版19－76）・須恵器坏身（第24図－77・図版19－77）・土師器碗（第24図－78・図版19－78）・須恵器壺（第24図－79・図版19－79）・土師器碗（第24図－80・図版19－80）・土師器甕（第24図－81・図版19－81）、中層より須恵器坏蓋（第24図－82・図版19－82）・須恵器坏身（第24図－83・図版19－83）・須恵器坏身（第24図－84・図版20－84）・須恵器壺蓋（第24図－85・図版20－85）・須恵器壺（第17図－86・第24図－86・図版20－86）・須恵器壺（第24図－87・図版20－87）・須恵器甕（第24図－88・図版20－88）・須恵器高坏（第24図－89・図版20－89）・須恵器高坏（第17図－90・第24図－90・図版11－３・図版20－90）・埦（第17図－92・第25図－92・図版21－92）・器財埴輪（第17図－93・第26図－93・図版11－４・図版21－93）・器財埴輪（第17図－94・第26図－94・図版11－４・図版21－94）などが出土している。当遺構は、上層より６世紀代から10世紀代の遺物、中層より５世紀末～６世紀代の遺物、下層より６世紀代の遺物が出土している。これらのことからこの河川が走行していた時期は、古墳時代後期以降と考えられる。

旧河川２　この遺構は、Ｘ＝－140.190～－140.200・Ｙ＝－32.210地区において検出した。検出面の標高は、Ｔ．Ｐ．＋23.400mを測った。この河川は調査地区の東端にあり、規模は、長さ約2.5m・深さ約1.2mであった。Ｄ地区内では地山面から掘り込まれた右岸のみを検出し、調査地区内で検出できた幅は約10mである。河川の底盤には数多くの自然石が堆積しており、流木も出土している。前述したようにＢ・Ｃ地区の第２遺構面で検出した落ち込み４が、南北方向に延びている肩部から西へ向かって低くなっている形態やその堆積土




第17図　遺物出土状況図

の状況から、この河川の左岸であると考える。その場合、河川の幅は約22.5mである。平面形態は、南北方向に主軸をおくものであるが、調査地区の南北方向の幅が狭いため詳細は不明である。

遺物は、上層より土師器皿（第27図－95・図版22－95）・瓦器碗（第27図－96・図版22－96）・須恵器坏（第27図－97・図版22－97）・須恵器坏身（第27図－98・図版22－98）・須恵器甕（第27図－99・図版22－99）・土師器甕（第27図－100・図版22－100）、下層より緑釉陶器（第27図－101・図版22－101）・須恵器壺（第27図－102・図版22－102）・須恵器碗（第27図－103・図版22－103）・須恵器広口壺（第27図－104・図版23－104）・須恵器甕（第27図－105・図版23－105）・須恵器壺（第27図－106・図版23－106）・土師器碗（第27図－107・図版23－107）・土師器甕（第27図－108・図版23－108）などが出土している。当遺構は、上層より6世紀代の遺物と10世紀代から11世紀代の遺物、下層より7世紀末～9世紀代の遺物が出土している。これらのことからこの河川が走行していた時期は、奈良時代末～平安時代初期以降と考えられる。

**●第3遺構面（第14図）**

この遺構面は、D地区の西側約2/3、すなわちX＝－140.200～－140.210・Y＝－32.210～－32.250地区で確認した。この面で検出した掘り込みは、第2遺構面で検出した旧河川1の底盤である。すなわち第2遺構面は、この旧河川が埋まった段階で営まれたものと考える。旧河川の断面形態を東側から西側へ向かって順に述べると、左岸から約1mの地点で約80cm低くなり、さらに約2mの地点で約20cm低くなる。そのまま西へ約10m平坦な地形が続いたところで約40cm低くなる。この地点が旧河川の中心にあたる。次に中心から西へ約4mの地点で約30cm高くなり、さらに約2.5mの地点で約60cm低くなる。この地点が最も低いところである。この地点から約6mのところが右岸であり、約2m高くなる。

以上のように旧河川1の断面形状はU字形を呈しているのではなく、底部に2本の掘り込みをもつW字形を呈している。

遺物は、土師器高坏（第24図－91・図版21－91）などが出土している。

## 第3節　出土遺物

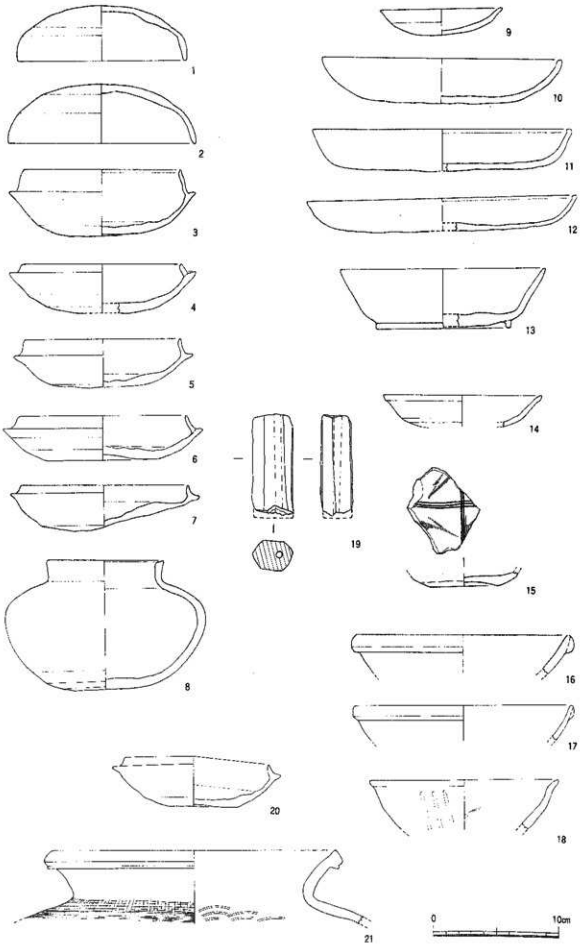
### ★包含層出土遺物（第18～19図・図版12～13）

**B・C地区**

1～2は須恵器坏蓋である。1は丸味をもつ天井部から、内湾しながらほぼ直下に下がり口縁部に至る形態。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間の稜線はみられず、口縁端部は丸く納める。口縁部外面には黒変した自然釉がかかっている（第18図－1・図版12－1）。2は若干丸味をもつ天井部から、内湾しながらやや外方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部外面は天井部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間の稜線はみられず、口縁端部は丸く納める（第18図－2・図版12－2）。

3～7は須恵器坏身である。3の体部は丸味をもち、口縁部の立ち上がりは若干内傾する。口縁端部は内傾する凹面をもつ。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部外面には黒変した自然釉がかかっている（第18図－3・図版12－3）。4は扁平な形態で口縁部の立ち上がりは短く、内傾している。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している（第18図－4・図版12－4）。5は扁平な形態であるが、底部がやや平坦気味である。口縁部の立ち上がりは内傾しながら若干「く」の字状に屈曲する。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している（第18図－5・図版12－5）。6は、扁平な形態であるが、底部がやや平坦気味である。口縁部の立ち上がりは内傾しながら若干「く」の字状に屈曲する。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している（第18図－6・図版12－6）。7は、扁平な形態で口縁部の立ち上がりは短く、内傾している。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。焼成時に変形している（第18図－7・図版12－7）。

8は須恵器短頸壺である。体部は扁平であり、最大径はやや上方に位置する。口縁は若干外反気味に直立し、端部は内傾する平坦面をもつ。底部外面は回転ヘラケズリ調整、体




第18図　包含層出土遺物

部内外面はナデ調整を施している（第18図－８・図版12－８）。

９～12は土師器皿である。９は小皿で、丸底気味の底部から口縁部が外上方へ伸び、体部と口縁部の境には強いヨコナデ調整による段がみられる。体部外面は不定方向のナデ・内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている（18図－９・図版12－９）。10は皿Ａで、平底の底部から内湾しながら口縁部に至り、口縁端部を丸く納める。体部は内外面ともナデ・口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している（第18図－10・図版12－10）。11は皿Ａで、平底の底部から口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は内側に折り返し、若干丸く肥厚する形を呈している。体部外面は粗いヘラケズリ・内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している（第18図－11・図版12－11）。12は皿Ａで、平底の底部から口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は内側に折り返し、若干丸く肥厚する形を呈している。体部外面は粗いヘラケズリ・内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している（第18図－12・図版12－12）。

13は須恵器坏Ｂである。体部は外上方に大きく逆「ハ」の字状に開き、丸く納まる口縁端部に至る。体部は内外面とも回転ナデ調整を施している（第18図－13・図版12－13）。

14は白磁皿の小片である。体部外面の底部付近は無釉で、そこから緩やかに屈曲し口縁部は外上方に伸びる。口縁端部の外面には面をもつ。内面は底部付近に緩い段をもつ（第18図－14・図版13－14）。

15は青磁皿の小片である。体部外面の底部付近は無釉である。内面には櫛描き文を施している（第18図－15・図版13－15）。

16～17は白磁碗の小片である。ともに口縁端部は玉縁状を呈する。16は外面に２次焼成を受けた跡がみられる（第18図－16・17・図版13－16・17）。

18は青磁碗の小片である。体部外面には片切り彫りの文様、内面には劃花文を施している（第18図－18・図版13－18）。

19は土錘である。断面は六角形を呈する（第18図－19）。

**Ｄ地区**

20は須恵器坏身である。扁平な形態で、底部がやや平坦気味である。口縁部の立ち上がりは短く、内傾している。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。焼成時に変形している（第18図－20・図版13－20）。

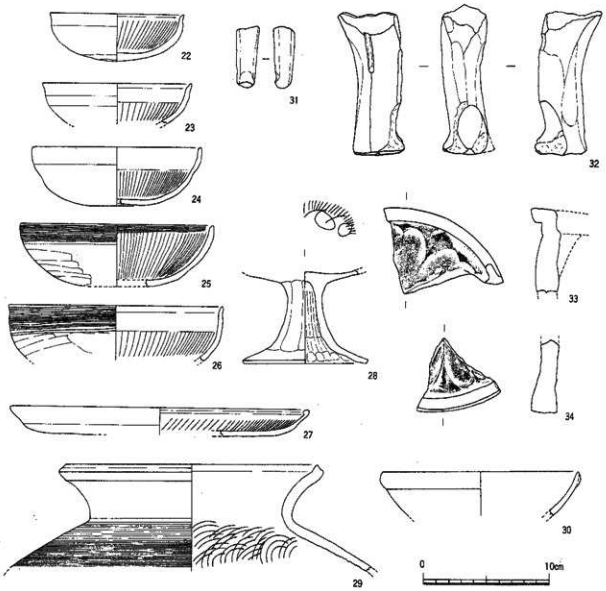
21は須恵器甕である。口縁部は短く外反する。口縁端部は、外側に折り返すことによって断面方形の突帯状にし、さらにその下部を棒状工具で強いナデを加えることにより断面三角形の突帯状にしている。体部外面は、平行叩き調整後カキ目調整を施している。内面には同心円文当て具痕が認められる（第18図－21・図版13－21）。

**立会調査**

今回の調査期間中にA地区の南側において、国道163号の下を府道が立体交差するためのトンネル工事が行なわれた。以下の遺物は、工事にあたって立会調査により出土したものである。同じ遺跡の範疇であるためここで報告する。

22～26は土師器坏Cである。22は、丸底気味の底部より内湾しながら口縁部に至り、口縁端部がヨコナデ調整により若干外反する。底部外面は粗いヘラケズリ調整、体部外面は不定方向のナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部内面には幅約２～３㎜間隔で放射状暗文が一段施されている（第19図－22・図版13－22）。23は、丸底気味と考えられる底部より内湾しながら口縁部に至り、口縁端部がヨコナデ調整により若干外反する。体部外面は不定方向のナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部内面には幅約３～５㎜間隔で放射状暗文が一段施されている（第19図－23・図版13－22）。24は、平底気味の底部より内湾しながら直立気味の口縁部に至り、口縁端部は丸く納まる。底部外面はヘラケズリ後ナデ調整、体部外面は不定方向のナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部内面には幅約１～５㎜間隔で放射状暗文が一段施されている（第19図－24・図版13－24）。25は、平底気味と考えられる底部より内湾しながら直立気味の口縁部に至り、口縁端部は内傾する平坦面をもつ。底部から体部にかけての外面はヘラケズリ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ調整、体部内面には幅約２～４㎜間隔で放射状暗文が一段、底部内面には連弧状の暗文が施されている（第19図－25・図版13－25）。26は、内湾しながら口縁部に至り、口縁端部がヨコナデ調整により若干外反する。体部外面はヘラケズリ調整、口縁部外面はヨコナデ後ヘラミガキ調整・内面はヨコナデ調整、体部内面には幅約２～４㎜間隔で放射状暗文が一段施されている（第19図－26・図版13－26）。

27は土師器皿Aである。平底の底部から口縁部が外上方へ伸び、口縁端部は強いヨコナデ調整により若干外反する。また口縁端部は内側に折り返し、丸く把厚する形を呈している。体部外面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部内面には幅約３～５㎜間隔で放射状暗文が一段施されている（第19図－27・図版13－27）。




第19図　包含層出土遺物

28は土師器高坏である。坏部は欠損しているが、体部外面の下方に段が認められる。体部内面には幅約２～４㎜間隔で放射状暗文、見込み部には連弧状暗文が施されている。脚部は外下方へ開きながら下がり、裾部付近でさらに大きく外下方へ開き接地部に至る。脚部外面は裾部付近までヘラケズリ調整・内面には粘土絞り痕と裾部に指頭痕が認められる（第19図－28・図版13－28）。

29は須恵器甕である。口縁部は短く外反する。口縁端部は、外側に折り返すことによって若干肥厚し、内側をつまみあげている。体部外面はカキ目調整を施している。内面には同心円文当て具痕が認められる（第19図－29・図版13－29）。

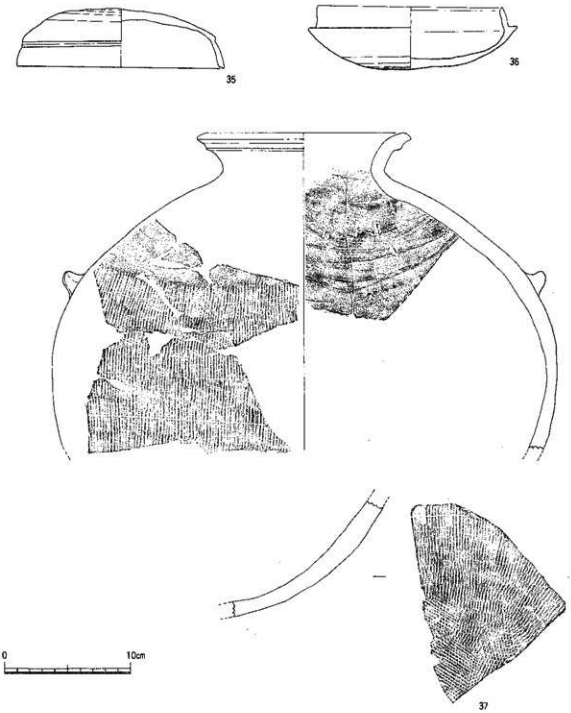
30は白磁碗の小片である。口縁端部は玉縁状を呈する。内外面に細かい貫入が認められる（第19図－30・図版14－30）。

31～32は土馬の脚部である。31は、粘土棒の先を軽くつまんで蹄を表現している（第19図－31・図版14－31)。32は、手づくねにより成形した後ナデ調整で仕上げている。脚部の内側から蹄の裏側に向かって直径約４㎜の孔が貫通している（第19図－32・図版14－32)。

土馬に関しては、平成７年度の木間池北方遺跡の調査において、大・中・小型７体が河川から出土している。出土地点は、今回出土したところから西へ約100ｍの地点である。そこは、今回調査したＣ・Ｄ地区の国道163号を挟んだ南側にあたり、前記の遺構の項で述べた旧河川２が向かっていると推定する場所にあたる。

33～34は素弁蓮華文軒丸瓦である。これらの瓦は、出土地点から北へ約200ｍのところにある、白鳳時代の創建とされる正法寺跡から出土しているものと同じものである（第19図－33～34・図版14－33～34)。

以上、包含層出土の遺物について述べてきた。時期については、Ｂ～Ｄ地区は６世紀代の須恵器類、８世紀中頃～後半の土師器皿Ａ類・須恵器坏Ｂ類、12世紀代の白磁碗、13世紀代の青磁皿・白磁皿などがみられた。また立会調査では７世紀代の土師器坏Ｃ類、７世紀前半の土師器高坏、８世紀後半の土師器皿Ａ類、12世紀代の白磁碗、７世紀後半の軒丸瓦などがみられた。




第20図　出 土 遺 物（A地区）

**★A地区出土遺物（第6図・第19図・図版1・図版14）**

35～37は土坑1から出土した遺物である。

35は須恵器坏蓋である。平坦気味の天井部から、内湾しながらやや外方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部と口縁部の間に稜線がみられ、口縁端部は内傾する面をもち、わずかに凹面を呈している。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第20図－35・図版14－35・第6図－35・図版1）。

36は須恵器坏身である。体部は若干丸味をもち、口縁部の立ち上がりはやや内傾する。口縁端部は内傾する面をもち、わずかに凹面を呈している。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第20図－36・図版14－36・図版1）。

35・36は法量・胎土・色調などからセットのものである可能性が高い。

37は韓式系陶質土器壺である。口縁部外面に1条の稜線を作り出し、最大径を体部の中位にもつ球形を呈し、肩部に1対の突起をもつ形態と考える。体部外面は、口縁部から肩部にかけて非常に丁寧なナデ調整が施され、肩部より下半には、幅1㎜程度の縦方向の平行叩きを施したのち幅1㎜程度の螺旋状沈線をいれている。内面は、頸部から肩部付近までは顕著なヨコナデ調整痕が認められるが、それ以外は丁寧なナデ調整が施されている。肩部外面の一部に降灰がみられ、体部の一部に歪みが認められる（第20図－37・図版14－37・第6図－37・図版1）。

**★B・C地区出土遺物（第11～13図・第21～22図・図版7・図版15～17）**

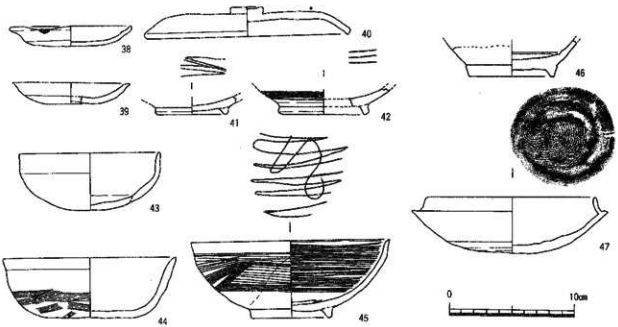
**第2遺構面出土遺物**

38はPit56から出土した土師器小皿である。口縁端部を内側に折り返して若干丸く肥厚し、いわゆる「て」の字状口縁を呈している。底部外面はユビオサエによる指頭痕が認められ、内面は反時計回りに円を描くようにナデ調整が施されている。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。また内面には油煙痕がみられ、口縁部の一部には灯心の跡があることから灯明皿に使用していたと考える。12世紀代（Bcタイプ）の時期に該当するものと考える（第21図－38・図版15－38）。

39はPit66から出土した土師器小皿である。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反している。14世紀代（Jタイプの最終段階）の時期に該当するものと考える（第21図－39・図版15－39）。

40はPit51から出土した須恵器坏Bの蓋である。ほぼ水平な天井部から外下方へ伸び、端部に至る。端部に若干のかえり部をもつ。8世紀前半の時期に該当するものと考える（第21図－40・図版15－40）。

41はPit41から出土した瓦器碗の小片である。高台は低く、断面台形を呈し、見込み部にジグザグ状の暗文が施されている。11世紀末～12世紀前半の時期に該当するものと考える（第21図－41・図版15－41）。




第21図　第２遺構面出土遺物（Ｂ・Ｃ地区）

42はPit71から出土した瓦器碗の小片である。高台は断面台形を呈し、体部外面には高台付近までヘラミガキ調整を密に施しており、見込み部にジグザグ状の暗文が施されている。11世紀末頃の時期に該当するものと考える（第21図－42・図版15－42）。

43～44は土坑15から出土した遺物である。

43は土師器坏である。丸底気味の底部から内湾しながら、直立する口縁部に至る。体部外面は磨耗のため調整は不明、内面はナデ調整が施されている。底部付近には粘土紐の接合痕が認められる（第21図－43・図版15－43）。44は土師器坏である。平底から外上方に開き、口縁部に至る。口縁端部は強いヨコナデ調整により外反している。体部外面と底部はハケメ調整を施し、口縁部付近はヨコナデ調整により消している。内面はナデ調整を施している（第21図－44・図版15－44）。

45は落ち込み４から出土した瓦器碗である。底部から内湾しながら直立気味の口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整によってわずかに外反し、口縁端部は若干尖り気味で、内面には沈線を巡らす。体部外面の中位から口縁部付近にかけて若干粗いヘラミガキ調整を施し、内面は密に施している。見込み部には、内面のヘラミガキ調整に先立ってジグザグ状の暗文が施されている。高台は断面台形を呈し、粘土板結合法による成形の痕跡がみられる。11世紀末頃（大和型瓦器碗の第Ⅰ段階）の時期に該当するものと考える（第21図－45・図版15－45）。

46は井戸１から出土した白磁端反碗の底部の小片である。削り出し高台は高く、畳付け部の幅は比較的狭い。内面には底部と体部の境に１条の沈線を巡らし、蛇の目釉剥ぎを施している。12世紀代の時期に該当するものと考える（第21図－46・図版15－46）。

**第３遺構面出土遺物**

48は土坑24から出土した手づくねの土師器碗である。体部は若干内湾しながら立ち上がり、口縁部は強いヨコナデ調整によって外反する。体部外面は磨耗しているため調整は不明であるが、ハケメ調整の痕跡と思われるものがみられる。内面の一部に板状工具によるナデ調整の痕跡がみられる（第22図－48・図版16－48）。

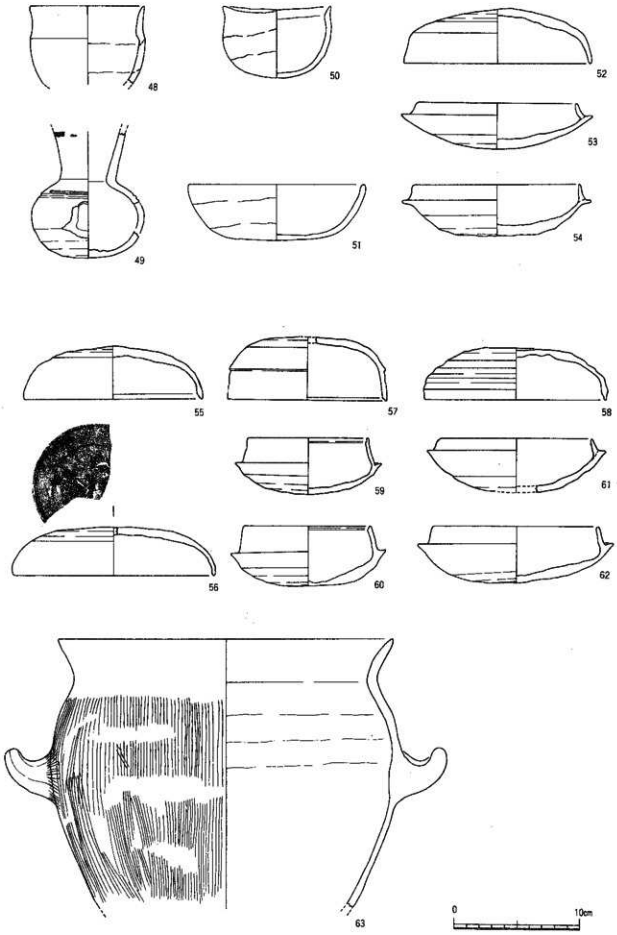
49は土坑32から出土した須恵器碗である。体部は中位に最大径をもつ球形を呈し、肩部に１条の沈線を巡らす。頸部は、若干外上方に開き気味に立ち上がり、波状文を巡らす。６世紀中頃の時期に該当するものと考える（第22図－49・図版16－49・第12図－④－49）。

50～54は落ち込み６から出土した遺物である。

50は手づくねの土師器碗である。丸底気味の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は強いヨコナデ調整により外反している（第22図－50・図版16－50・第11図－①－50・図版７－１）。51は土師器坏である。平底から外上方に開き、口縁部に至る。口縁端部は丸く納める。体部は内外面ともナデ調整、口縁部付近はヨコナデ調整を施している（第22図－51・図版16－51・第11図－①－51・図版７－１）。52は須恵器坏蓋である。丸味をもつ天井部から、内湾しながらやや外下方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部外面は天井部から1/2程度回転ヘラケズリ後回転ナデ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間の稜線はみられず、口縁端部は丸く納める。６世紀後半の時期に該当するものと考える（第22図－52・図版16－52・第11図－①－52・図版7－1）。53は須恵器坏身である。扁平な形態で口縁部の立ち上がりは短く、内傾している。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。内面はにぶい橙色を呈しており、焼成不良である。６世紀後半の時期に該当するものと考える（第22図－53・図版16－53・第11図－①－53・図版７－１）。54は須恵器坏身である。平底気味の底部から外反しながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは垂直気味で、口縁端部は尖り気味に丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。６世紀前半の時期に該当するものと考える（第22図－54・図版16－54・第11図－①－54・図版７－１）。

55～63は古墳から出土した遺物である。

55は須恵器坏蓋である。丸味をもつ天井部から、内湾しながらやや外方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、




第22図　第３遺構面出土遺物（Ｂ・Ｃ地区）

口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間の稜線はみられず、口縁端部は内傾する面をもつ。6世紀中頃の時期に該当するものと考える（第22図－55・図版16－55・第13図－⑤－55・図版７－２）。56は須恵器坏蓋である。平坦気味の天井部から、内湾しながら口縁部に至る形態。体部外面は天井部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間の稜線はみられず、口縁端部は丸く納める。天井部に降灰がみられ、「×」状のヘラ記号が認められる。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第22図－56・図版16－56・第13図－⑤－56・図版７－２）。57は須恵器坏蓋である。丸味をもった天井部から内湾しながら口縁部に至る。口縁端部は内傾する凹面をもち、口縁部と体部の間の稜線は短く、シャープさにかける。体部外面は天井部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第22図－57・図版16－57・第13図－⑥－57・図版７－３）。58は須恵器坏蓋である。平坦気味の天井部から、内湾しながら口縁部に至る形態。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間の稜線はみられず、口縁端部は内傾する面をもつ。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第22図－58・図版17－58・第13図－⑥－58・図版７－３）。59は須恵器坏身である。体部は丸味をもち、口縁部の立ち上がりは若干内傾する。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反し、内傾する凹面をもつ。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部外面には降灰がみられる。6世紀初頭の時期に該当するものと考える（第22図－59・図版17－59・第13図－⑥－59・図版７－３）。60は須恵器坏身である。体部は丸味をもち、口縁端部の立ち上がりは若干内傾する。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反し、内傾する凹面をもつ。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。59の土器と比べると分厚い作りである。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第22図－60・図版17－60・第13図－⑤－60・図版７－２）。61は須恵器坏身である。体部は丸味をもち、口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。口縁端部は尖り気味に丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第22図－61・図版17－61・第13図－⑤－61・図版７－２）。62は須恵器坏身であり、下層から出土した。体部は丸味をもち、口縁部の立ち上がりは若干内傾する。

口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第22図－62・図版17－62）。63は土師器把手付きの甕である。体部外面は粗い縦方向のハケメ調整・内面はナデ調整を施している。把手は、根元が幅広く先端に向かって狭くなり、側面からみると上方に反っている。断面形態は楕円形で上部が凹んでいる（第22図－63・図版17－63・第13図－⑤－63・図版７－２）。

★D地区出土遺物（第15～17図・第23～27図・図版11・図版17～23）

**第１遺構面出土遺物**

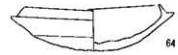
64は土坑41から出土した須恵器坏身である。体部は扁平な形態で、口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。口縁端部は尖り気味に丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は反時計回りのナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部外面には著しい降灰が認められ、焼成時に変形している。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第23図－64・図版17－64・第17図－64）。

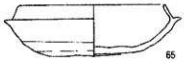
65～66は溝８から出土した遺物である。

65は須恵器坏身である。平底気味の底部から内湾しながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは内傾する。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反し、丸く納める。体部外面は底部からか2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第23図－65・図版17－65・第15図－65）。66は韓式系土器平底鉢である。口縁部は頸部から外上方へ開く形態である。体部外面の頸部から下半には、幅約４㎜程度の粗い縦方向の平行叩きを施している。内面はナデ調整を施しているが、粘土紐の接合痕が残っている（第23図－66・図版17－66・第15図－66）。

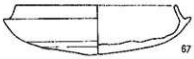
**第２遺構面出土遺物**

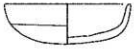
67は溝９から出土した須恵器坏身である。平底気味の底部から内湾しながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは内傾する。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反し、丸く納める。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部外面全面に降灰が認められる。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第23図－67・図版18－67）。


64

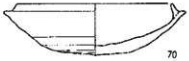

65

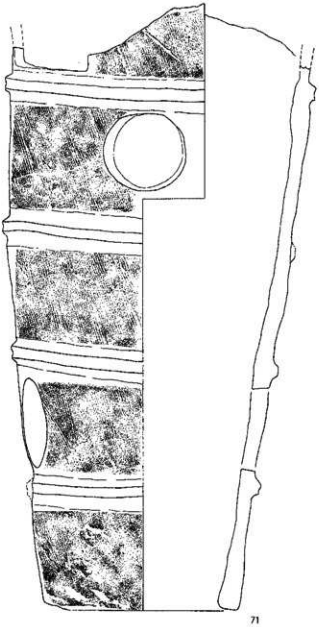
66

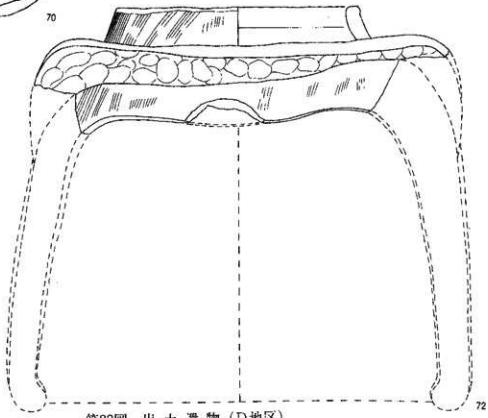

67


68

69


70


71


72

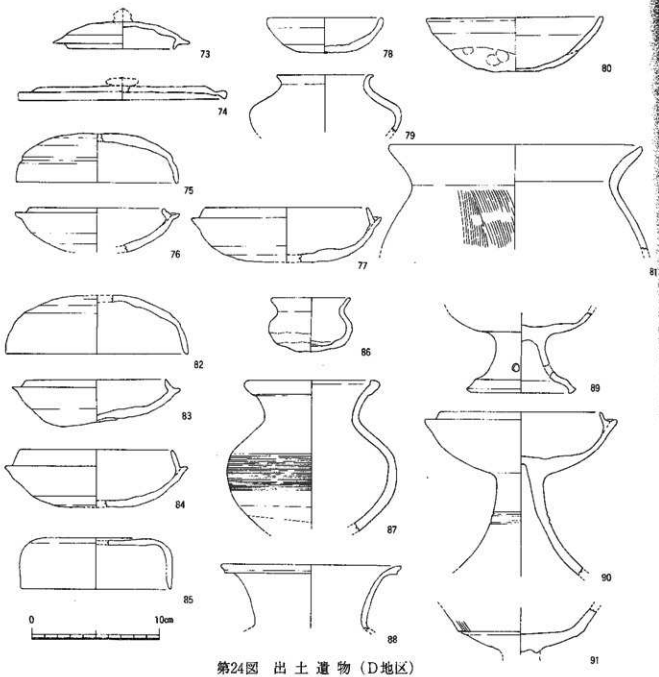
第23図　出 土 遺 物（D地区）

68～72は土坑54から出土した遺物である。

68は土師器坏である。平底気味の底部から若干外上方へ開く口縁部に至る。口縁端部は丸く納める。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている（第23図－68・図版18－68・第16図－68・図版11－1）。69は土師器坏である。平底気味の底部から、体部は外上方へ伸び、口縁部はヨコナデ調整により外反している。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。この土器は高坏の坏部とも思われるが、底部に脚部との接合痕の跡は認められない（第23図－69・図版18－69）。70は須恵器坏身である。平底気味の底部から外上方に開きながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第23図－70・図版18－70・第16図－70・図版11－1）。71は円筒埴輪である。5段の円筒埴輪であるが5段目の多くを欠損している。2段目と4段目にそれぞれ1対の円形のスカシを穿っている。スカシの直径は約6～7㎝である。タガの断面形は台形に近い「M」字形を呈し、タガの幅は器壁との接合部で約2.4cm・高さ約0.7cmを測り、タガの突出度は29である。調整は、外面は斜め方向の丁寧なハケメ調整を施し、内面は丁寧なナデ調整を施すが、一部に幅約2㎝の粘土紐の痕跡が残る。タガの周辺はヨコナデ調整を施し、底部付近には板状工具により押圧したと思われる痕跡が認められる。黒斑は認められない。基部には禾本科植物の痕跡があり、5段目にはヘラ記号が認められる。川西編年のV期前半に該当するものと考える（第23図－71・図版18－71・第16図－71・図版11－1・2）。72は移動式竈の掛け口と庇の一部である。直径約19㎝の掛け口の下前面に最大幅約7㎝の庇が付く形態である。掛け口の端部は、外側に折り返すことによって若干肥厚している。体部外面は粗いハケメ調整・内面は丁寧なナデ調整が施されている。庇部は上面の先端部分にハケメ調整が認められ、ほかはナデ調整が施されている。下面にはユビオサエによる指頭痕が残っている。使用した明確な痕跡は認められないが、庇の下面と掛け口の内面が若干灰黒色に変色している（第23図－72・図版18－72・第16図－72・図版11－1・2）。

73～94は旧河川1から出土した遺物である。

73～81は上層から出土。73は須恵器坏Gの蓋である。天井部は緩やかに内湾し、端部はヨコナデ調整により若干外反する。宝珠つまみが付く形態である。天井部外面は2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、端都は内外面ともヨコナデ調整を施している。7世紀前半の時期に該当するものと考える（第24図－73・図版19－73）。74は須恵器坏Bの

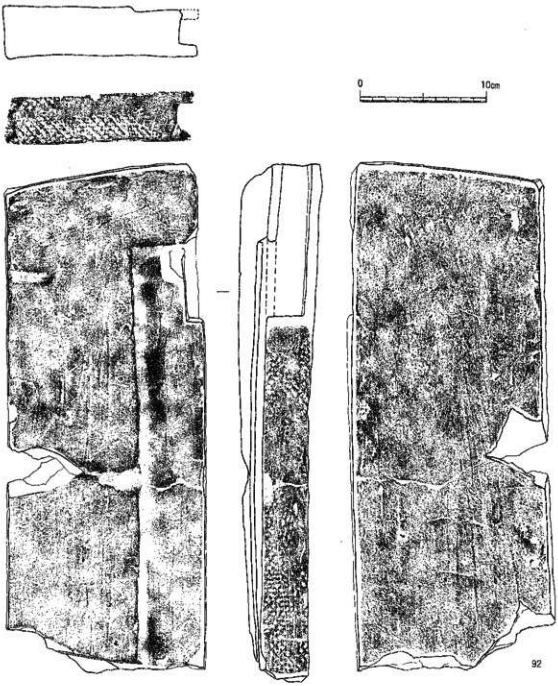



第24図　出土遺物（D地区）

蓋である。ほぼ水平な天井部から端部に至る。端部は強いヨコナデ調整により外下方へ屈曲し、若干のかえり部をもつ。8世紀後半の時期に該当するものと考える（第24図－74・図版19－74）。75は須恵器坏蓋である。丸味をもつ天井部から、内湾しながらやや外下方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間は強いヨコナデ調整により若干の稜線がみられ、口縁端部は丸く納める。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第24図－75・図版19－75）。76は須恵器坏身である。体部は丸味をもち、底部から外上方に開きながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。口縁端部はヨコナデ調整により若干外反し、丸く納める。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。

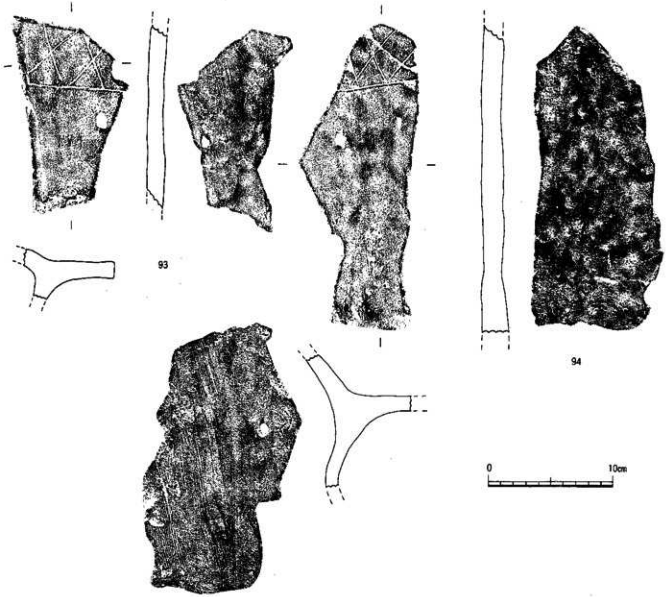
6世紀後半の時期に該当するものと考える（第24図－76・図版19－76）。77は須恵器坏身である。平底気味の底部から外上方に開きながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは内傾し、口縁端部は尖り気味に丸く納める。体部外面は底部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部外面には自然釉が認められる。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第24図－77・図版19－77）。78は須恵器小碗である。底部外面に粘土紐の巻き上げ痕が認められる。内外面ともナデ調整を施している（第24図－78・図版19－78）。79は須恵器短頸の小壺である。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第24図－79・図版19－79）。80は土師器碗Aである。体部外面はユビオサエ調整・内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。e手法による製作である。9世紀中頃～10世紀中頃の時期に該当するものと考える（第24図－80・図版19－80）。81は土師器甕である。体部外面はハケメ調整・内面はナデ調整を施している。長胴の甕と思われる（第24図－81・図版19－81）。

82～90・92～94は中層から出土。82は須恵器坏蓋である。丸味をもつ天井部から、内湾しながらやや外下方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部外面は天井部から2/3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間はヨコナデ調整により若干の稜線がみられ、口縁端部は丸く納める。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第24図－82・図版19－82）。83は須恵器坏身である。平底気味の底部から外上方に開きながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは短く内傾し、口縁端部は尖り気味に丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部外面には降灰が認められる。焼成時に変形している。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第24図－83・図版19－83）。84は須恵器坏身である。平底気味の底部から内湾しながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは内傾する。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。外面に降灰が認められる。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第24図－84・図版20－84）。85は須恵器壺の蓋である。内外面ともナデ調整が施されている。外面に降灰が認められる（第24図－85・図版20－85）。86は須恵器小壺である。外面は底部に粗いナデ調整・体部の下半部には強いヨコナデ調整・上半部はナデ調整を施している。内面は底部に粘土紐の痕跡がみられ、体部はナデ調整を施している。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を




第25図　出土遺物（D地区）

施している。体部外面と口縁部内面の一部に降灰・自然釉が認められる。小型の土器としては丁寧な作りである。土器の中には残留物（漆であろうか）が付着している（第24図－86・図版20－86・第17図－86）。87は須恵器壺である。体部は球形より若干扁平であり、最大径は中位に位置する。口縁端部は、外側に折り返すことにより若干肥厚し、内側は強いヨコナデ調整により内上方に若干突出している。体部外面の上半と内面は丁寧なナデ調整・体部外面の中位はカキメ調整・下半は回転ヘラケズリ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第24図－87・図版20－87）。88は須恵器甕である。




第26図　出土遺物（D地区）

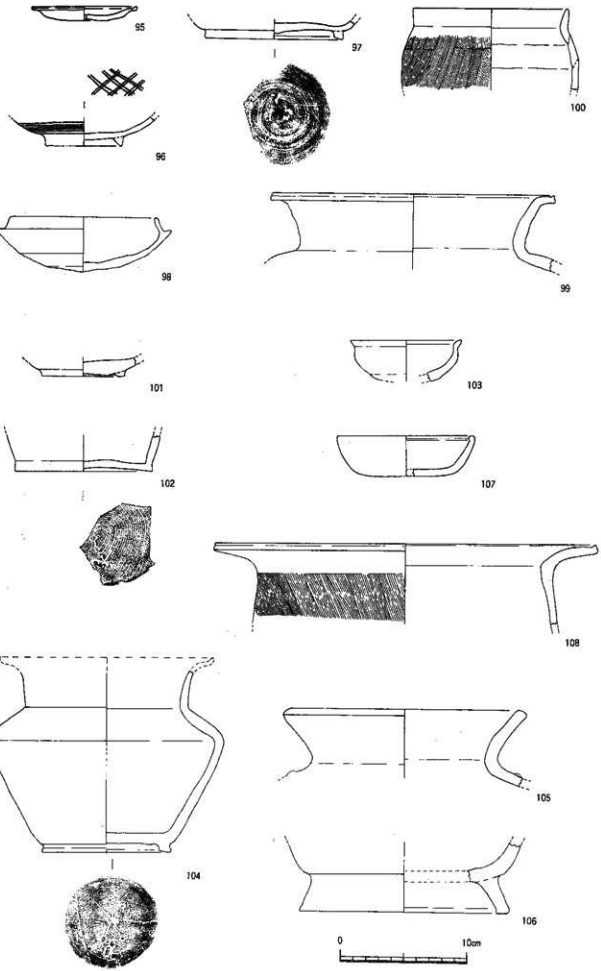
口縁部は緩やかに外反し、端部に至る。口縁端部は外側に折り返すことにより肥厚し、さらにヨコナデ調整を加えてその下部を三角形の突帯状にしている。内外面は丁寧なナデ調整を施している。5世紀末の時期に該当するものと考える（第24図－88・図版20－88）。89は須恵器高坏である。坏部内面は回転ナデ調整・ほかは内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。坏部外面に降灰が認められる。5世紀末の時期に該当するものと考える（第24図－89・図版20－89）。90は須恵器有蓋高坏である。坏部は緩やかに内湾しながら、外上方へ伸び受部に至る。口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。口縁端部は丸く納める。脚部は「ハ」の字状に大きく広がる。脚部の中位に2条の沈線が巡る。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第24図－90・図版20－90・第17図－90・図版11－3）。92は須恵質の塼である。長方形を呈しているが短辺の一方が欠損している。一方の長辺の端は凹形に切り込まれている。これは塼を組み合わせる

ためのものであろうか。また切り込みが有る長辺側の表面は浅く切り込まれている。切り込みが有る長辺と短辺には格子の叩き調整、ほかはナデ調整を施している（第25図－92・図版21－92・第17図－92）。93・94は器財埴輪である。円筒形部分が倒立技法による製作と思われる点、盾面の端に切り込みが認められる点、盾面に穿孔が認められる点などから石見型盾であると考える。盾面には斜格子の文様が線刻され、ほかの部分はナデ調整が施されている。円筒形部分の外面は縦方向のハケメ調整後ナデ調整を施し、内面はナデ調整が施されているが一部に幅約2.5cmの粘土紐痕が認められる。93・94は同一個体と思われる（第26図－93・94・図版21－93・94・第17図－93・94・図版11－4）。

91は旧河川1の下層から出土した土師器高坏である。坏部の底部と口縁部の境で大きく「く」の字状に屈曲する形態である。屈曲する部分にハケメ調整を施している（第24図－91・図版21－91）。

95～108は旧河川2から出土した遺物である。

95～100は上層から出土。95は土師器皿である。口縁端部を内側に折り返して若干丸く肥厚し、いわゆる「て」の字状口縁を呈している。底部外面はユビオサエによる指頭痕が認められ、内面はナデ調整が施されている。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。10世紀代の時期に該当するものと考える（Baタイプ）（第27図－95・図版22－95）。96は瓦器碗の小片である。高台は断面三角形に近い台形を呈し、体部外面には高台付近までヘラミガキ調整を密に施しており、見込み部には、内面のヘラミガキ調整に先立って斜格子状の暗文が施されている。これはジグザグ状の暗文を方向をかえて重ねた結果によるものである。11世紀中葉頃（大和型瓦器碗の第Ⅰ段階）の時期に該当するものと考える。（第27図－96・図版22－96）。97は須恵器坏Bの高台部である。内外面ともナデ調整を施している。高台端部の接地面は斜めになっており、外端部のみが接地する形態である。底部外面に「×」状のヘラ記号が認められる（第27図－97・図版22－97）。98は須恵器坏身である。体部は丸味をもち、底部から外上方に開きながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは内傾する。口縁端部は丸く納める。体部外面は底部から1/2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第27図－98・図版22－98）。99は須恵器甕である。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部付近で屈曲し水平方向に伸びる逆「コ」の字形を呈する。端部は若干つまみ上げている。内外面ともナデ調整を施している。肩部外面と口縁部内面に降灰が認められる（第27図－99・図版22－99）。100は土師器甕である。体部は緩やかに内湾




第27図　出 土 遺 物（D地区）

しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部外面は細かいハケメ調整を施している。内面はナデ調整を施しているが幅約２cmの粘土紐痕が残っている（第27図－100・図版22－100）。

101～108は下層から出土。101は緑釉陶器の高台の小片である。焼成は灰白色を呈する軟質で、釉色はオリーブ黄色である。釉薬は内外面とも全面に施釉されている。高台は貼り付けの幅広輪高台である（第27図－101・図版22－101）。102は須恵器壺Ｇ底部の小片である。体部外面・内面全体はナデ調整が施されている。底部外面は回転糸切り後未調整である。８世紀後半～９世紀初頭の時期に該当するものと考える（第27図－102・図版22－102）。103は須恵器小碗と考える。内外面ともナデ調整が施されている。外面には降灰・自然釉が確認できる（第27図－103・図版22－103）。104は須恵器広口壺である。「く」の字状に張った肩部から頸部は若干外上方に伸びる。口縁部はほぼ水平に外反し、端部をつまみ上げている。高台端部の接地面は斜めになっており、外端部のみが接地する形態である。内外面ともナデ調整が施されている。底部外面に「×」状のヘラ記号があり、肩部と底部内面に降灰が認められる。７世紀末の時期に該当するものと考える（第27図－104・図版23－104）。105は須恵器甕の口縁部の小片である。外面と口縁部内面にオリーブ灰色の自然釉が認められる（第27図－105・図版23－105）。106は須恵器壺の高台の小片と考える。高台の端部は、内側のナデ調整により若干内側に突出している。底部内面に降灰が認められる（第27図－106・図版23－106）。107は土師器碗である。平底の底部から体部は、外上方に伸び口縁部に至る。口縁端部は内側に折り返すことによって若干丸く肥厚している。内外面ともナデ調整が施されている（第27図－107・図版23－107）。108は土師器甕の口縁部の小片である。体部から大きく外上方に屈曲し、ほぼ水平の口縁部に至る。口縁端部は上方につまみ上げている。体部外面はハケメ調整・内面はナデ調整を施し、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。８世紀後半～９世紀初頭の時期に該当するものと考える（第27図－108・図版23－108）。

## 第4節　ま と め

今回の発掘調査では、古墳時代後期から中世（特に鎌倉時代を中心とする）にかけての遺構を各地区のそれぞれの遺構面において数多く検出した。しかし本文中でも述べたとおりほとんどの遺構において、出土する遺物が詳細な時期を判断するには困難な小片であったり、遺物を出土しないものであった。また層位毎に遺構面の検出に努めたのであるが、確認したそれぞれの時代で生活面の整地を繰り返したためか、同じ遺構面に様々な時期の遺構が混在するという状況であった。以下、簡単に整理しまとめにかえておきたい。

**古墳時代以前**

縄文時代の遺構は検出できなかったが、後世の遺構や包含層から十数点の縄文時代の土器やサヌカイト片が出土した。過去の調査においても、隣接する遺跡や今回の調査地区の東側から草創期の有舌尖頭器や中期～晩期の土器などが出土しており、周辺においてこの時代の集落が存在していた可能性は大きいと考えられる。

**古墳時代**

この時期の遺構は各地区で検出した。そのなかでB・C地区の第3遺構面とD地区の第1・第2遺構面において多くの遺構を検出した。時期的には6世紀全般の遺物が出土しており、古墳時代後期を遡るものは確認しなかった。

特筆できるものとしては、第1に数点の韓式系土器が出土したことがあげられる。第2章でも述べたが、当遺跡や周辺の遺跡においても過去にこれらの土器が多く出土しており、渡来系の集団の存在をうかがわせるものである。第2にB・C地区で検出した方墳の周溝があげられる。この遺構は調査地区の幅が狭いこともあって、全体を検出することはできず、また墳丘部についても後世の削平を受けているため確認できなかった。ただしこの遺構を検出した面の上層（第2遺構面）において、10～50cm大の花崗岩の自然石が集積している状況を確認している。この場所が次の面で検出した周溝の上面にあたることから、これからは周溝が埋没する最終段階に崩れた古墳の葺石の可能性が高いと考える。またD地区の第2遺構面で検出した土坑54からは、ほぼ完全な形の円筒埴輪が出土しておりその周辺からは器財埴輪や円筒埴輪の破片が出土している。これらの点から考えると、この遺構は本文中でも述べたように古墳の周溝の一部である可能性がある。時期的には前述した古墳と同じ後期に属するものである。過去の周辺遺跡の調査では、東側に広がる清滝古墳群や大上遺跡・木間池北方遺跡・城遺跡が、この時期の古墳群を形成していることがわかっ

ている。今回2基の古墳を検出したことにより、これらの古墳群の西端がこの地域にあたることが判明したと考える。

D地区で検出した旧河川1は、遺物の出土状況から6世紀後半以降に走行していたものと考えられる。その後8世紀から10世紀にはその大半が埋没しており、中世には完全に埋没したと考えられる。

**奈良・平安時代**

この時期の遺構は、B・C・D地区の第2遺構面で検出している。旧河川2については、遺物の出土状況から7世紀末～9世紀初頭以降に走行していたものと考えられ、その後10世紀から11世紀には埋没していたと考えられる。また遺構は検出できなかったが、立会調査において7世紀から8世紀の土器類や土馬・素弁蓮華文軒丸瓦などが出土している。これらに関するものは、南側に隣接する木間池北方遺跡の平成7年度の発掘調査において検出している。土器類については、7世紀前半の土器が一括で出土している土坑を検出し、土馬については、前記した旧河川2が向かっていると考えられる地点において、旧河川内から大・中・小型のものが7体出土している。素弁蓮華文軒丸瓦については、当遺構の北方約200mの台地上において7世紀後半に創建された正法寺の創建当時の瓦と同じものである。以上の点から7世紀以降の段階にこの周辺で集落が営まれ、土馬を用いた祭祀を行なっていたと考えられる。また瓦や寺院に関すると思われる塼などが出土していることから集落と寺院の関係についても注目される。

**中世以降**

この時期の遺構についても周辺地域を含めて数多く確認している。今回も井戸などを検出していることから、この地域においても集落を形成していたことが確認できた。近世以降のこの地域は、耕作地として利用されていたことが、第1遺構面で検出した耕作溝などから確認できる。

以上、調査成果を簡単に述べてきた。この周辺の地域については、国道の拡幅工事に伴う発掘調査が継続中である。今後これらの発掘調査が完了した段階で報告をしていく予定である。この国道163号を中心とした地域の遺跡の変遷については、それらの段階で今後の課題としてあらためて検討していきたい。

## 遺物観察表（小石は$\phi$1～5㎜以内、砂粒はそれ以下とする）

| 遺構名 | 種類 | 挿図番号 | 図版番号 | 器形 | 法量(cm) 口径 高径 底径 [推定] (残存) | 色調 | 胎土 素質 砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 包含層 | 須恵器 | 18－1 | 12－1 | 坏蓋 | [13.4] 4.4 － | 灰色 (N 5/) | 密 | 2/3 | 外面に自然釉 |
| | | 18－2 | 12－2 | 坏蓋 | [15.0] 4.7 － | 灰色 (N 6/) | 密 | 1/2 | |
| | | 18－3 | 12－3 | 坏身 | 12.4 5.3 － | (外) 暗青灰色 (5PB 4/1) (断) 赤灰色 (5R 5/1) | 小石を多く含む | 完形 | 外面に自然釉 |
| | | 18－4 | 12－4 | 坏身 | [12.8] (3.9) － | 青灰色 (5PB 5/1) | 密 | 1/2 | |
| | | 18－5 | 12－5 | 坏身 | 12.4 3.8 － | 灰色 (N 6/) | 砂粒を多く含む | 完形 | |
| | | 18－6 | 12－6 | 坏身 | [13.2] 3.5 － | 灰色 (N 6/) | 密 | 1/2 | |
| | | 18－7 | 12－7 | 坏身 | 13.4 3.4 － | (外) 暗灰色 (N 3/) (内) 灰白色 (N 7/) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 完形 | 焼成時に変形 |
| | | 18－8 | 12－8 | 短頸壺 | 9.0 10.3 5.0 | 灰色 (N 6/) | 密 | ほぼ完形 | |
| | 土師器 | 18－9 | 12－9 | 皿 | 9.6 2.1 － | 浅黄橙色 (7.5YR 8/3) | 砂粒・赤色粒子をやや多く含む | ほぼ完形 | |
| | | 18－10 | 12－10 | 皿A | [19.0] 3.5 [8.0] | 黄橙色 (10YR 8/6) | 小石・砂粒・赤色粒子をやや多く含む | 1/2 | |
| | | 18－11 | 12－11 | 皿A | [20.6] (3.3) [13.0] | 浅黄橙色 (7.5YR 8/4) | 密 | 1/3 | |

| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>挿番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定](残存) | 色調 | 胎土<br>素地<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 包含層 | 土師器 | 18−12<br>12−12 | 皿<br>A | [21.4]<br>(2.5)<br>[14.0] | 橙色<br>(5YR 6/6) | 密 | 1/2 | |
| | 須恵器 | 18−13<br>12−13 | 坏<br>B | [16.2]<br>4.8<br>[10.6] | 灰白色<br>(N 7/) | 砂粒を多く含む | 1/2 | |
| | 白磁 | 18−14<br>13−14 | 皿 | [12.6]<br>(2.5)<br>− | 灰白色<br>(7.5Y 8/1) | 密<br>黒色粒子を含む | 小片 | |
| | 青磁 | 18−15<br>13−15 | 皿 | −<br>(1.0)<br>[5.4] | 灰白色<br>(5Y 8/2) | 密 | 小片 | 内面に<br>櫛描文 |
| | 白磁 | 18−16<br>13−16 | 碗 | [17.0]<br>(3.1)<br>− | 灰白色<br>(7.5Y 7/1) | 密 | 小片 | 2次焼成<br>玉縁状口縁 |
| | 白磁 | 18−17<br>13−17 | 碗 | [17.4]<br>(2.8)<br>− | 灰白色<br>(7.5Y 7/1) | 密<br>黒色粒子を含む | 小片 | 玉縁状口縁 |
| | 青磁 | 18−18<br>13−18 | 碗 | [15.0]<br>(4.0)<br>− | 明緑灰色<br>(7.5GY 7/1) | 密 | 小片 | 外面：片切り彫りの文様<br>内面：劃花文 |
| | 土製品 | 18−19 | 錘 | 長：(8.0)<br>巾：3.2<br>厚：2.3 | 浅黄橙色<br>(7.5YR 8/4) | 砂粒・小石を多く含む | 一部欠損 | 断面<br>六角形 |
| | 須恵器 | 18−20<br>13−20 | 坏<br>身 | 11.4<br>4.0<br>5.6 | 灰色<br>(N 5/) | 密 | 完形 | 焼成時に変形 |
| | | 18−21<br>13−21 | 甕 | [22.6]<br>(5.4)<br>− | (外)<br>暗青灰色<br>(5PB 4/1)<br>(断)<br>赤灰色<br>(5R 6/1) | 密 | 口縁部のみ<br>1/2 | |
| | 土師器 | 19−22<br>13−22 | 坏<br>C | [10.6]<br>3.8<br>− | 橙色<br>(5YR 6/6) | 密 | 1/2 | 内面に放射状暗文 |

| 遺構名 | 種類 | 図版号<br>押番<br>図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定](残存) | 色調 | 胎土<br>質<br>素<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 包含層 | 土師器 | 19－23<br>13－23 | 坏<br>C | [11.8]<br>(3.2)<br>－ | 橙色<br>(5YR 6/6) | 密 | 1／4 | 内面に放射状暗文 |
| | | 19－24<br>13－24 | 坏<br>C | [13.4]<br>4.6<br>[5.0] | (外)<br>橙色<br>(5YR 6/6)<br>(内)<br>にぶい黄橙色<br>(10YR 7/2) | 密 | 1／3 | 内面に放射状暗文 |
| | | 19－25<br>13－25 | 坏<br>C | [15.4]<br>(4.9)<br>－ | 橙色<br>(5YR 6/6) | 密 | 1／4 | 内面に放射状暗文<br>底部に連弧状暗文 |
| | | 19－26<br>13－26 | 坏<br>C | [17.0]<br>(4.3)<br>－ | 橙色<br>(5YR 6/6) | 緻密 | 1／8 | 内面に放射状暗文 |
| | | 19－27<br>13－27 | 皿<br>A | [23.8]<br>(2.2)<br>－ | 橙色<br>(5YR 6/8) | 密 | 小片 | 内面に放射状暗文 |
| | | 19－28<br>13－28 | 高坏 | －<br>(7.0)<br>[10.0] | 浅黄橙色<br>(10YR 8/3) | 緻密 | 1／2 | 坏部内面に連弧状暗文 |
| | 須恵器 | 19－29<br>13－29 | 甕 | [20.0]<br>(8.2)<br>－ | 灰色<br>(N 5/) | 密 | 1／4 | |
| | 白磁 | 19－30<br>14－30 | 碗 | [15.8]<br>(3.5)<br>－ | 灰白色<br>(5Y 7/2) | 密<br>黒色粒子を含む | 小片 | 玉縁状口縁 |
| | 土製品 | 19－31<br>14－31 | 土馬 | 長：(4.8)<br>巾：1.7<br>厚：1.5 | 灰白色<br>(10YR 8/1) | 砂粒を多く含む | 脚部 | |
| | | 19－32<br>14－32 | 土馬 | 長：(11.8)<br>巾：3.0<br>厚：3.5 | 浅黄橙色<br>(10YR 8/3) | 砂粒・金雲母を多く含む | 脚部 | |
| | 瓦 | 19－33<br>14－33 | 軒丸 | 長：(6.8)<br>巾：(7.8)<br>厚：1.6 | (外)<br>暗灰色<br>(N 3/)<br>(断)<br>灰白色<br>②5Y 8/1) | 砂粒を多く含む | 1／4 | 素弁蓮華文 |

| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>挿番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定]残存 | 色調 | 胎土<br>素質<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 包含層 | 瓦 | 19−34<br>14−34 | 軒丸 | 長：(5.7)<br>巾：(6.5)<br>厚：1.3 | (外)<br>暗灰色<br>(N 3/)<br>(内)<br>灰白色<br>(2.5Y 8/1) | 砂粒を多く含む | 1／6 | 素弁蓮華文 |
| 土坑1 | 須恵器 | 20−35<br>14−35 | 坏蓋 | [16.4]<br>4.6<br>− | 灰色<br>(N 5/) | 密<br>黒色粒子を含む | 2／3 | |
| | | 20−36<br>14−36 | 坏身 | [14.8]<br>5.0<br>− | 灰色<br>(N 5/) | 密<br>黒色粒子を含む | 1／2 | |
| | 陶質土器 | 20−37<br>14−37 | 壺 | 17.0<br>(24.8)<br>− | (外)<br>灰赤色<br>(2.5YR 4/2)<br>(断)<br>赤褐色<br>(10R5/4) | 緻密 | 2／3 | 韓式系 |
| Pit 56 | 土師器 | 21−38<br>15−38 | 皿 | 9.8<br>1.6<br>5.4 | にぶい黄橙色<br>(10YR 7/2) | 密<br>金雲母をやや多く含む | 完形 | ・「て」の字状口縁<br>・Bcタイプ |
| Pit 66 | | 21−39<br>15−39 | 皿 | [9.2]<br>1.6<br>[4.0] | 浅黄橙色<br>(7.5YR 8/6) | 砂粒・赤色粒子を多く、<br>金雲母を少量含む | 1／4 | Jタイプ |
| Pit 51 | 須恵器 | 21−40<br>15−40 | 坏B蓋 | [16.0]<br>2.4<br>− | 灰白色<br>(N 7/ ) | 密 | 1／5 | |
| Pit 41 | 瓦器 | 21−41<br>15−41 | 碗 | −<br>(1.4)<br>[5.6] | 暗灰色<br>(N3/) | 密 | 小片 | ジグザグ状暗文 |
| Pit 71 | | 21−42<br>15−42 | 碗 | −<br>(2.3)<br>[6.6] | 灰色<br>(N 6/) | 密 | 小片 | ジグザグ状暗文 |
| 土坑15 | 上師器 | 21−43<br>15−43 | 坏 | [11.2]<br>4.5<br>[3.0] | 橙色<br>(5YR 7/8) | 砂粒・小石・赤色粒子を多く、金雲母を少量含む | 1／2 | |
| | | 21−44<br>15−44 | 坏 | 13.8<br>4.7<br>6.9 | 浅黄橙色<br>(10YR 8/4) | 砂粒を多く、金雲母をやや多く含む | ほぼ完形 | |

| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>挿番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定][残存] | 色調 | 胎土<br>素質<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 落込4 | 瓦器 | 21−45<br>15−45 | 碗 | 15.8<br>6.1<br>6.4 | 暗灰色<br>(N 3/ ) | 密 | 2/3 | ・ジグザグ状暗文<br>・大和型 |
| 井戸1 | 白磁 | 21−46<br>15−46 | 碗 | −<br>(2.9)<br>[6.8] | 灰白色<br>(7.5Y 7/1) | 密 | 小片 | 釉の目釉剥ぎ |
| 包含層 | 須恵器 | 21−47<br>15−47 | 坏身 | 13.4<br>4.5<br>− | (外)<br>灰色<br>(N 4/)<br>(内)<br>橙色<br>(5YR 6/6) | 砂粒・小石を多く含む | 完形 | 内面に同心円状の圧痕 |
| 土坑24 | 土師器 | 22−48<br>16−48 | 碗 | [9.0]<br>(6.2)<br>− | 橙色<br>(5YR 7/6) | 砂粒・赤色粒子を多く、金雲母を少量含む | 1/4 | 手づくね |
| 土坑32 | 須恵器 | 22−49<br>16−49 | 鉢 | −<br>(10.0)<br>− | 灰色<br>(N 6/) | 砂粒・小石を少量含む | 口縁部欠損 | |
| 落ち込み6 | 土師器 | 22−50<br>16−50 | 碗 | 8.6<br>5.4<br>− | 浅黄橙色<br>(10YR 8/4) | 小石を多く、金雲母を少量含む | 完形 | 手づくね |
| | | 22−51<br>16−51 | 坏 | [14.0]<br>4.4<br>6.6 | 浅黄橙色<br>(7.5YR 8/6) | 小石・金雲母を多く含む | 1/2 | |
| | 須恵器 | 22−52<br>16−52 | 坏蓋 | 14.8<br>4.2<br>− | (外)<br>灰白色<br>(7.5Y 8/1)<br>(内)<br>浅黄色<br>(2.5Y 8/3) | 砂粒・小石をやや多く含む | ほぼ完形 | |
| | | 22−53<br>16−53 | 坏身 | [12.6]<br>3.6<br>− | (外)<br>浅黄色<br>(2.5Y 8/3)<br>(内)<br>にぶい橙色<br>(7.5YR 7/4) | 砂粒を少量含む | 1/2 | 焼成不良 |
| | | 22−54<br>16−54 | 坏身 | [13.2]<br>4.0<br>[6.2] | 青灰色<br>(5B 6/1) | 砂粒・小石をやや多く、黒色粒子を少量含む | 1/2 | |
| 古墳 | | 22−55<br>16−55 | 坏蓋 | [14.2]<br>4.2<br>− | 灰色<br>(N 5/) | 砂粒を少量含む | 1/2 | |

| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>押番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径高径<br>底径<br>[推定][残存] | 色調 | 胎土<br>素質<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 古墳 | 須恵器 | 22－56<br>16－56 | 坏蓋 | [16.1]<br>(3.8)<br>－ | 灰色<br>(N 6/ ) | 砂粒・黒色粒子を多く含む | 1／3 | 外面に「×」状のヘラ記号 |
| | | 22－57<br>16－57 | 坏蓋 | [12.6]<br>(5.0)<br>－ | 青灰色<br>(5PB 5/1) | 砂粒・小石・黒色粒子をやや多く含む | 1／2 | |
| | | 22－58<br>17－58 | 坏蓋 | [14.4]<br>4.1<br>－ | (外)<br>灰白色<br>(7.5Y 7/1)<br>(内)<br>暗灰色<br>(N 3/) | 砂粒・小石をやや多く含む | 1／2 | |
| | | 22－59<br>17－59 | 坏身 | [9.6]<br>4.5<br>－ | 暗青灰色<br>(5PB 4/1) | 砂粒・小石・黒色粒子をやや多く含む | 1／2 | 外面に降灰 |
| | | 22－60<br>17－60 | 坏身 | 10.2<br>4.8<br>－ | 灰色<br>(N 6) | 砂粒・小石・黒色粒子をやや多く含む | ほぼ完形 | |
| | | 22－61<br>17－61 | 坏身 | [12.0]<br>(4.2)<br>－ | 灰色<br>(N 6/) | 砂粒・黒色粒子をやや多く含む | 1／3 | |
| | | 22－62<br>17－62 | 坏身 | 13.2<br>4.5<br>－ | 灰色<br>(N 5/) | 小石を多く含む | ほぼ完形 | |
| | 土師器 | 22－63<br>17－63 | 甕 | [26.6]<br>(21.4)<br>－ | 浅黄橙色<br>(10YR 8/4) | 砂粒・小石を多く含む | 1／2 | 把手付き |
| 土坑41 | 須恵器 | 23－64<br>17－64 | 坏身 | 11.0<br>3.3<br>－ | 暗青灰色<br>(5PB 4/1) | 砂粒・小石を少量含む | 完形 | ・外面に降灰<br>・焼成時に変形 |
| 溝8 | | 23－65<br>17－65 | 坏身 | 12.0<br>4.0<br>6.4 | 暗青灰色<br>(5B 4/1) | 砂粒・小石を少量含む | ほぼ完形 | |
| | 土師器 | 23－66<br>17－66 | 平底鉢 | [12.0]<br>(5.8)<br>－ | にぶい赤褐色<br>(5YR 5/4) | 砂粒・金雲母を多く含む | 1／4 | 韓式系 |

| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>押番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定][残存] | 色調 | 胎土<br>素質<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 溝9 | 須恵器 | 23−67<br>18−67 | 坏身 | 12.8<br>3.9<br>− | 暗青灰色<br>(5PB 4/1) | 砂粒・小石を多く、黒色粒子をやや多く含む | 完形 | 外面に降灰 |
| 土坑54 | 土師器 | 23−68<br>18−68 | 坏 | 10.0<br>3.2<br>− | (外)<br>黄橙色<br>(7.5YR 7/8)<br>(内)<br>にぶい橙色<br>(5YR 7/4) | 砂粒・小石を多く、金雲母を少量含む | ほぼ完形 | |
| | | 23−69<br>18−69 | 坏 | [12.6]<br>(4.5)<br>− | 橙色<br>(5YR 6/6) | 砂粒を多く含む | 1/2 | |
| | 須恵器 | 23−70<br>18−70 | 坏身 | [12.2]<br>4.1<br>− | 灰白色<br>(5Y 7/1) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 1/4 | |
| | 埴輪 | 23−71<br>18−71 | 円筒 | −<br>(49.7)<br>15.8 | 黄橙色<br>(7.5YR 8/8) | 砂粒・小石を多量に含む | 5段目の多くを欠損 | 5段目にヘラ記号 |
| | 土製品 | 23−72<br>18−72 | 移動式竈 | [19.0]<br>(9.0)<br>− | 浅黄橙色<br>(7.5YR 8/6) | 砂粒・金雲母を多量に含む | 庇部のみ残存 | |
| 旧河川1 | 須恵器 | 24−73<br>19−73 | 坏G蓋 | 8.6<br>(2.1)<br>− | 灰色<br>(N 6/) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | つまみ部欠損 | |
| | | 24−74<br>19−74 | 坏B蓋 | [16.4]<br>(1.1)<br>− | 青灰色<br>(5B 5/1) | 砂粒を少量含む | 1/8 | |
| | | 24−75<br>19−75 | 坏蓋 | [12.8]<br>(3.8)<br>− | 灰白色<br>(N 7/) | 砂粒を少量含む | 1/2 | |
| | | 24−76<br>19−76 | 坏蓋 | [10.8]<br>(3.5)<br>− | 灰白色<br>(7.5Y 7/1) | 砂粒を少量含む | 1/4 | |
| | | 24−77<br>19−77 | 坏身 | [12.8]<br>(4.3)<br>− | (内)<br>明青灰色<br>(5P 7/1)<br>(断)<br>浅黄橙色<br>(10YR 8/3) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 1/2 | 外面全体に自然釉 |

| 遺構名 | 種類 | 図版号<br>挿番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定][残存] | 色調 | 胎土<br>素質<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 旧河川1 | 須恵器 | 24−78<br>19−78 | 碗 | [10.0]<br>2.8<br>− | 灰白色<br>(5Y 8/1) | 砂粒を少量含む | 1/8 | |
| | | 24−79<br>19−79 | 短頸壺 | [7.6]<br>(4.5)<br>− | 灰色<br>(N 5/) | 密 | 1/5 | |
| | 土師器 | 24−80<br>19−80 | 碗A | [14.0]<br>4.2<br>− | 橙色<br>(5YR 6/6) | 砂粒を多く含む | 1/4 | ・e手法 |
| | | 24−81<br>19−81 | 甕 | [20.0]<br>(8.2)<br>− | 橙色<br>(7.5YR 7/6) | 砂粒・小石・金雲母を多く含む | 1/8 | |
| | 須恵器 | 24−82<br>19−82 | 坏蓋 | [14.4]<br>(4.6)<br>− | 灰色<br>(N 6/) | 密 | 1/2 | |
| | | 24−83<br>19−83 | 坏身 | 11.0<br>3.2<br>− | 青灰色<br>(5PB 5/1) | 密 | 完形 | ・外面に降灰<br>・焼成時に変形 |
| | | 24−84<br>20−84 | 坏身 | [12.0]<br>(4.5)<br>[5.0] | (内)<br>青灰色<br>(5PB 5/1)<br>(断)<br>暗紫灰色<br>(5RP 3/1) | 密 | 1/3 | ・外面に降灰 |
| | | 24−85<br>20−85 | 蓋 | [12.0]<br>(4.0)<br>− | 灰白色<br>(N 7/) | 砂粒を少量含む | 1/4 | ・外面に降灰 |
| | | 24−86<br>20−86 | 壺 | 6.2<br>4.3<br>− | 灰色<br>(N 5/) | 密 | ほぼ完形 | ・外面・口縁部内面に降灰・自然釉 |
| | | 24−87<br>20−87 | 壺 | [10.4]<br>(11.4)<br>− | 灰白色<br>(7.5Y 7/1) | 密 | 1/2 | |
| | | 24−88<br>20−88 | 甕 | [14.2]<br>(5.0)<br>− | 灰色<br>(N 4/) | 密 | 1/4 | |

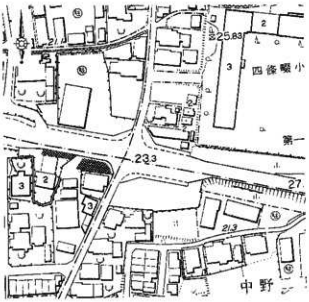
| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>挿番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定](残存) | 色調 | 胎土<br>素質<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 旧河川1 | 須恵器 | 24－89<br>20－89 | 高坏 | －<br>(6.3)<br>[8.4] | 灰色<br>(N 4/) | 密 | 1/2 | 坏部外面に降灰 |
| | 須恵器 | 24－90<br>20－90 | 高坏 | [12.8]<br>(12.3)<br>－ | 灰白色<br>(5Y 8/1) | 砂粒を多く含む | 1/4 | |
| | 土師器 | 24－91<br>21－91 | 高坏 | －<br>(3.3)<br>－ | 浅黄橙色<br>(7.5YR 8/3) | 小石を多く含む | 坏部の一部のみ | |
| | 須恵質 | 25－92<br>21－92 | 壺 | 長：(40.0)<br>巾：15.3<br>厚：3.7 | 灰色<br>(N 6/) | 砂粒を多く、小石を少量含む | 一部欠損 | |
| | 埴輪 | 26－93<br>21－93 | 器財 | 長：(15.6)<br>巾：(9.2)<br>厚：1.2 | 浅黄橙色<br>(7.5YR 8/6) | 砂粒を多く、金雲母を少量含む | 小片 | 石見型盾 |
| | 埴輪 | 26－94<br>21－94 | 器財 | 長：(23.8)<br>巾：(8.0)<br>厚：1.8 | 同上 | 同上 | 小片 | 同上 |
| 旧河川2 | 土師器 | 27－95<br>22－95 | 皿 | [8.4]<br>(1.1)<br>－ | 灰白色<br>(10YR 8/2) | 砂粒・金雲母を少量含む | 1/2 | ・「て」の字状口縁<br>・Baタイプ |
| | 瓦器 | 27－96<br>22－96 | 碗 | －<br>(2.1)<br>[6.2] | 灰色<br>(N 4/) | 密 | 1/2 | ・大和型<br>・斜格子状暗文 |
| | 須恵器 | 27－97<br>22－97 | 坏B | －<br>(1.3)<br>[11.0] | 灰色<br>(N 6/) | 密 | 1/2 | 底部外面に「×」状のヘラ記号 |
| | 須恵器 | 27－98<br>22－98 | 坏身 | [11.8]<br>4.2<br>－ | 灰色<br>(N 5/) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 1/2 | |
| | 須恵器 | 27－99<br>22－99 | 甕 | [22.2]<br>(5.9)<br>－ | 灰色<br>(N 5/) | 小石を少量含む | 1/6 | 肩部外面と口縁部内面に降灰 |

| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>挿番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定][残存] | 色調 | 胎土<br>素質<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 旧河川2 | 土師器 | 27-100<br>22-100 | 甕 | [12.2]<br>(6.4)<br>— | 橙色<br>(2.5YR 6/8) | 砂粒・金雲母を多く含む | 1/4 | |
| | 緑釉陶器 | 27-101<br>22-101 | | —<br>(1.4)<br>[6.6] | (外)<br>オリーブ黄色<br>(7.5Y 6/3)<br>(断)<br>灰白色<br>(2.5Y 8/2) | 密 | 小片 | |
| | 須恵器 | 27-102<br>22-102 | 壺<br>G | —<br>(2.8)<br>[10.8] | 灰色<br>(N 5/) | 密 | 小片 | |
| | | 27-103<br>22-103 | 碗 | [8.8]<br>(3.2)<br>— | 明紫灰色<br>(5P 7/1) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 1/3 | 外面に降灰・自然釉 |
| | | 27-104<br>23-104 | 広口壺 | —<br>(15.3)<br>10.2 | 灰色<br>(N 5/) | 密 | 口縁部欠損 | ・底部外面に「×」状のヘラ記号<br>・肩部と底部内面に降灰 |
| | | 27-105<br>23-105 | 甕 | [20.0]<br>(6.0)<br>— | (内)<br>灰白色<br>(N 7/)<br>(断)<br>褐灰色<br>(10YR 5/1) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 口縁部のみ<br>1/4 | 外面と口縁部内面に自然釉 |
| | | 27-106<br>23-106 | 壺 | —<br>(5.4)<br>[16.4] | 灰色<br>(N 6/) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 高台のみ<br>1/8 | |
| | 土師器 | 27-107<br>23-107 | 碗 | [11.0]<br>(3.2)<br>— | 浅黄橙色<br>(10YR 8/3) | 砂粒・赤色粒子・金雲母をやや多く含む | 1/4 | |
| | | 27-108<br>23-108 | 甕 | [30.0]<br>(6.4)<br>— | 淡橙色<br>(5YR 8/3) | 小石を少量含む | 口縁部のみ<br>1/8 | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

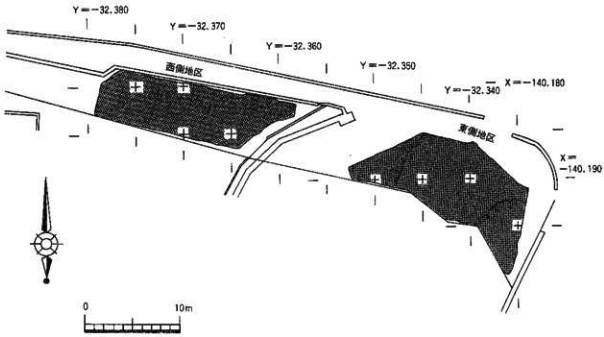
# 第４章 中野遺跡の調査成果

今回の発掘調査は、工事によって遺構の破壊が予測される部分の全面発掘調査であり、面積は約226㎡である。なお調査地区内は、便宜上大きく東側地区と西側地区に分け、それぞれ国土平面直角座標値（第Ⅵ系）を用いて５ｍ四方の区画設定を行なった。それぞれの区画は、その南西にあたる杭のX・Y値をもってその地区の名称とした。

発掘調査は、それぞれ重機で盛土・旧耕土・床土を掘削した後、堆積土を層位ごとに掘り下げ、各面で遺構の有無を確認しながら進めていった。（第１・２図）




第１図　位置図




第２図　配置図

## 第1節　基本層序（第3・6図）

東側地区の地表面の標高は、東端でT.P.+23.000m、西端でT.P.+23.500mであり、西側地区の地表面の標高は、東端でT.P.+23.400m、西端でT.P.+23.300mであった。それぞれ隣接する国道と同じ高さであり、調査前は歩道の一部と荒地であった。

以下、確認した基本層序を上層から記載する。

### ★ 東側地区

第Ⅰ層　アスファルト・コンクリート　上面はT.P.+23.000m～T.P.+23.500mで、厚さは10cm前後である。

第Ⅱ層　盛土　上面はT.P.+23.000m～T.P.+23.400mで、厚さは10～80cmである。現代の盛土。

第Ⅲ層　灰黄色系の砂質土　上面はT.P.+23.000m前後で、厚さは10～20cmである。近世以降の包含層。

第Ⅳ層　灰色系の砂質土　上面はT.P.+22.700m～T.P.+22.900m前後で、厚さは10～50cmである。落ち込み状遺構1の上層。平安時代の包含層。

第Ⅴ層　黒褐色系の砂質土　上面はT.P.+22.600m～T.P.+22.800m前後で、厚さは10～50cmである。落ち込み状遺構1の下層、落ち込み状遺構2の覆土。古墳時代の包含層。

第Ⅵ層　黄色系の砂質土（粗砂・小礫を含む）　上面はT.P.+22.700m前後で、厚さは40cm前後である。無遺物層。

第Ⅶ層　灰黄色系の細砂で強くしまっている。上面はT.P.+22.300m前後で、ほぼ水平に堆積している。地山面である。

### ★ 西側地区

第Ⅰ層　盛土　上面はT.P.+23.300m～T.P.+23.400mで、厚さは1.1～1.9mである。現代の盛土。

第Ⅱ層　旧耕土　上面はT.P.+22.000m～T.P.+22.200mで、厚さは20cm前後である。現代の耕土。

第Ⅲ層　床土　上面はT．P．+21.800m前後で、厚さは10cm前後である。現代の床土。

第Ⅳ層　灰色系の砂質土　上面はT．P．+22.000m前後で、厚さは30cm前後である。近世以降の包含層。

第Ⅴ層　暗灰色系の砂質土　上面はT．P．+21.500m前後で、厚さは10～40cmである。耕作溝の覆土。中世の包含層。

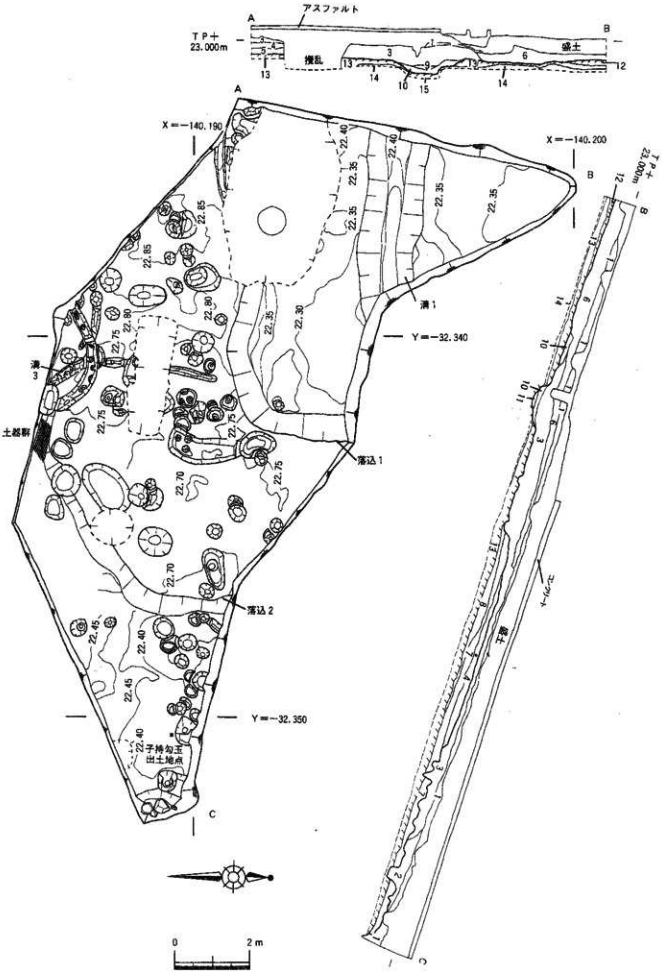
第Ⅵ層　灰オリーブ色系の砂質土　上面はT．P．+21.500m～T．P．+21.900m前後で、厚さは10～50cmである。溝Aの覆土。奈良時代の包含層。

第Ⅶ層　黄褐色系の粗砂　上面はT．P．+21.500m前後で、厚さは20cm前後である。無遺物層。

第Ⅷ層　橙色粘土　上面はT．P．+21.200m前後で、ほぼ水平に堆積している。地山面である。

★ 東側地区　土層説明

第１層　灰黄色砂質土（2.5Y 6/2）
第２層　黒褐色砂質土（10YR 3/2）
第３層　黒褐色砂質土（5YR 3/1）
第４層　にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/4）
　白色・橙色の小礫を多く含む
第５層　灰黄色砂質土（2.5Y 5/1）
第６層　灰色砂質土（5Y 6/1）
第７層　黄色砂質土（2.5Y 8/8）
　粗砂を多く含む
第８層　にぶい黄色粗砂（2.5Y 6/4）
　しまりが強い
第９層　黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
第10層　灰白色砂質土（5Y 7/1）
第11層　紫灰色粘土（5P 6/1）
第12層　にぶい黄褐色粗砂（10YR 5/4）
第13層　灰黄色細砂（2.5Y 6/1）
　しまりが強い
第14層　赤黒色粘土（7.5R 2/1）
　灰白色粘土（5Y 7/1）が混合
第15層　灰白色細砂（N 7/）




第3図　東側地区 遺構平面図・壁断面図

★ 西側地区　土層説明

第1層　灰オリーブ色砂質土（7.5Y 5/2）
第2層　灰色砂質土（N 4/）
第3層　灰色砂質土（N 5/）
第4層　灰色砂質土（N 6/）
第5層　灰オリーブ色砂質土（5Y 4/2）
第6層　緑灰色砂質土（10GY 5/1）
第7層　暗緑灰色砂質土（7.5GY 4/1）
第8層　暗緑灰色砂質土（10GY 4/1）しまりが強い
第9層　青灰色粗砂（10BG 5/1）
第10層　灰白色粗砂（N 7/）
第11層　黄褐色粗砂（2.5Y 5/4）しまりが強い
第12層　橙色粘土（7.5YR 6/8）

## 第2節　遺　構

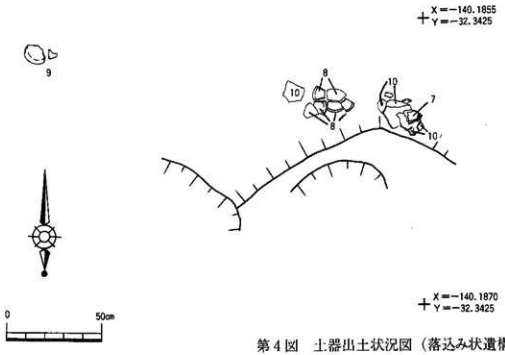
★ 東側地区（第3～5図・第7～8図・図版1～3・5～7）

この地区は、国道163号と府道が交差する東中野交差点の南西角にあたる。耕作土などはみられず、盛土下は近世以降の包含層であった。ただしその上面で耕作溝と思われる跡を数条確認したことから、耕土を除去して盛土をしたと思われる。

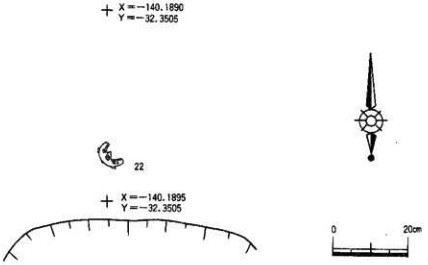
表土より約70cm掘り下げたところで遺構面を検出した。検出面の標高は、T.P.＋22.700m前後であり、全面ほぼ水平であった。遺構は、Pitと土坑をあわせて78基、溝4本、落ち込み状遺構2基を検出した。しかしほとんどの遺構は、小片の遺物のみの出土であったり、無遺物であった。図示できる遺物が出土した遺構は以下のとおりである。

**落ち込み1**　この遺構はX＝－140.200・Y＝－32.345地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋22.750mを測った。遺構の肩部は、東側から南側へ向かって逆「コ」の字状に近い形で屈曲しており、その一部は、下水の立坑により破壊を受けている。検出できた規模は、長さ約6.5m・深さ約45cmを測った。この遺構のもう一方の肩部は、調査地区外に存在すると考えられる。また遺構の底部には、長さ約5m・幅約1.5m・深さ約30cmの直線的な形態の溝1が、東西方向に掘り込まれていた。

遺物は、黒色土器A類碗（第7図－1・図版5－1）・土師器甕（第7図－4・図版5－4）・土師器甕（第7図－5・図版5－5）などが上層より出土している。当遺構は、出土遺物からは9世紀代に埋没したと考えられる。ただし遺物は出土しなかったが、下層に




第4図　土器出土状況図（落込み状遺構2）




第5図　子持ち勾玉出土状況図

後述する落ち込み2と同じと思われる古墳時代の包含層が堆積していた。このことから遺構の開始時期は、9世紀代よりも遡るものと考えておきたい。また溝1についても、遺物は出土していないが、遺構の覆土の上層に古墳時代の包含層が堆積していたことから同様に考えておきたい。

**溝3**　この遺構はX＝－140.190・Y＝－32.340～－32.345地区において検出した。検出面の標高は、T.P.＋22.750mを測った。遺構は北西側から緩やかなカーブを描いた後、南へ直線的に伸びている。規模は、長さ約4.2m・幅約30cm・深さ約10cmを測った。また遺構の底部には、直径約15cm・深さ約5cmの穴が等間隔に掘り込まれていた。同じ様な状況が、この遺構を東西方向に切っている同形態の溝でも確認している。

遺物は、土師器甕（第7図－2・図版5－2）・土師器甕（第7図－3・図版5－3）などが出土している。当遺構は、出土遺物から9世紀前半と考えられる。

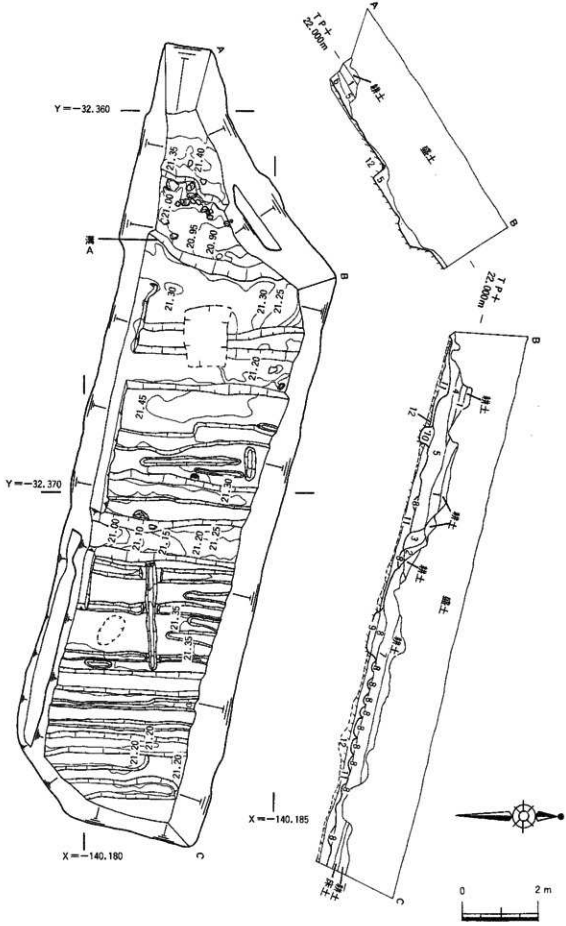
**落ち込み2**　この遺構はX＝－140.190～－140.195・Y＝－32.345～－32.355地区において検出した。検出面の標高は、北側でT.P.＋22.750m・南側でT.P.＋22.700mを測った。遺構の肩部は、東側から南側へ向かって逆「コ」の字状に近い形で緩やかに屈曲している。規模は、長さ約7.2m・深さ約35cmを測った。この遺構のもう一方の肩部は、西側地区との間の未調査地域に存在するものと思われる。また遺構の底部には、大小のPitないし土坑が20基掘られていた。

この落ち込み2からは、北東隅の肩部から一括で3点の遺物（第4図・図版3－3）、覆土の中層から子持ち勾玉1点（第5図・図版3－1・2）、滑石製臼玉26点（図版7－23）、製塩土器9片（図版7－24）が出土している。このように滑石製の製品と製塩土器がセットで出土する状況は、四條畷市内の古墳時代の遺跡、特に馬飼い集団の集落跡と考えている中野遺跡周辺での一つの特徴である。

遺物は、須恵器坏身（第7図－6・図版5－6）・須恵器坏身（第7図－7・図版5－7）・須恵器坏身（第7図－8・図版5－8）・須恵器坏蓋（第7図－9・図版5－9）土師器把手付椀（第7図－10・図版5－10）・子持ち勾玉（第8図－22・図版7－22）・滑石製臼玉（図版7－23）・製塩土器（図版7－24）などが出土している。当遺構は、出土遺物から古墳時代後期前半と考えられる。

**★ 西側地区（第6～7図・図版4）**

この地区は、東側地区より約10m西側に位置する。調査前は、旧耕土面に約1.2～1.5mの盛土をした荒地であった。旧耕土面はこの地区の東端から西へ約6mの地点で、約35cmの高低差をもって西側へ向かって一段低くなっている。この状況から2枚の耕作地に分かれていたことがわかる。




第6図　西側地区 遺構平面図・壁断面図

表土より約1.8m下げたところで遺構面を検出した。検出面の標高は、T.P.+21.400m前後であり、全面ほぼ水平であった。遺構は、Pitと土坑をあわせて4基、溝20本を検出した。しかしほとんどの遺構は、小片の遺物のみの出土であったり、無遺物であった。図示できる遺物が出土した遺構は以下のとおりである。

**溝A**　この遺構はX=−140.185・Y=−32.365地区において検出した。検出面の標高は、東側でT.P.+21.350m・西側でT.P.+21.300mを測った。遺構は北東側から南へ緩やかなカーブを描いてほぼ直線的に伸びている。規模は、長さ約3.8m・幅約2m・深さ約40cmを測った。溝の底には10〜50cm大の花崗岩の自然石が堆積していた。

遺物は、上層から須恵器坏B蓋（第7図−11・図版6−11）・須恵器坏B（第7図−12・図版6−12)、下層から須恵器坏蓋（第7図−13・図版6−13）・土師器把手（第7図−14・図版6−14）などが出土している。当遺構は、出土遺物から8世紀後半に埋没したと考えられる。溝という性格上、常にオープンな施設であり。掘削された以後の遺物だけではなく、それ以前の遺物も含まれている可能性は高いと考えられる。ただし東側地区で検出した落ち込み2の状況や時期と下層から出土した遺物を重視すると、遺構の開始時期が古墳時代後期前半まで遡る可能性も考えておきたい。

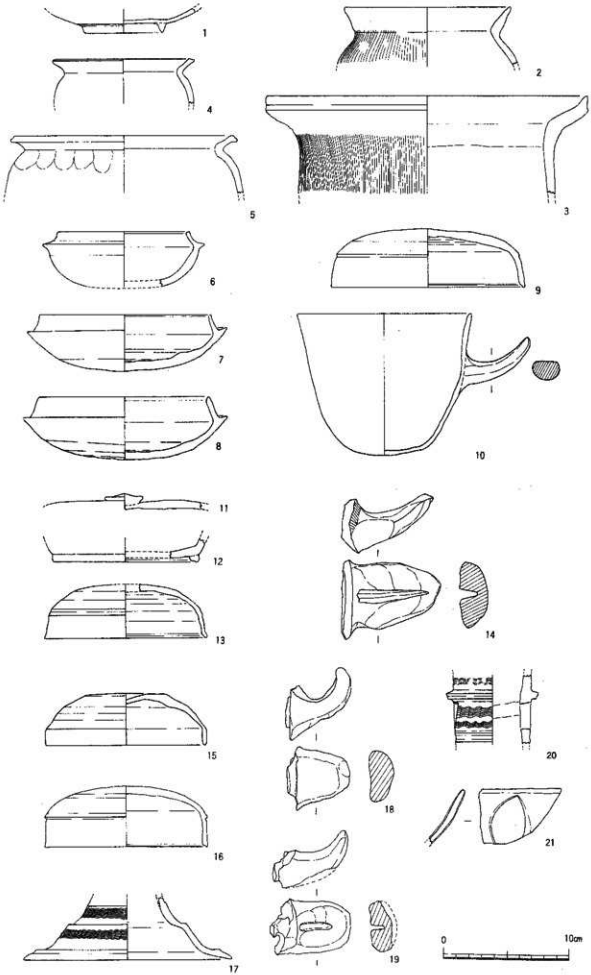
この遺構のほかに当地区では、19本の溝を検出している。これらのうち幅が1mを超える2本は別として他の17本は、ほぼ一定の幅で直線的に掘られている検出状況や堆積土などから、周辺の遺跡の発掘調査でも検出している耕作溝であると考えられる。出土遺物は小片ではあるが、おそらく中世以降の時期のものであると考える。

## 第3節　出土遺物

### ★ 包含層出土遺物（第7〜8図・図版6〜7）

**東側地区**

15〜16は須恵器坏蓋である。15は平らな天井部から体部が外下方へ開き、稜線はなく口縁部はほぼ直下に下る。口縁端部は丸く納める。体部外面は天井部から1／2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀後半の時期に該当するものと考える（第7図−15・図版6−15)。16は丸みのある天井部から短く端部の丸い稜線に至り、口縁部はほぼ直下に下る。口縁端部は内傾する段をもつ。体部外面は天井部から1／2程度回転ヘラケズリ・内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコ




第7図　出土遺物

ナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第7図－16・図版6－16）。17は須恵器筒形器台の脚の裾部である。大きく「ハ」の字状に開く脚部で、裾端部から3箇所に断面三角形の突帯をめぐらし文様帯を区画している。文様は波状文を施し、外面に自然釉が認められる。5世紀後半の時期に該当するものと考える（第7図－17・図版6－17）。18は土師器把手である。根元が幅広く先端に向かって若干狭くなる。側面からみると先端が上方に大きく反っている。断面形態は楕円形である（第7図－18・図版6－18）。23～24はサヌカイト製の打製石鏃である（第8図－23～24・図版7－23～24）。25はサヌカイト製の石錐の未完製品である（第8図－25・図版7－25）。

西側地区

19は土師器把手である。根元から先端に向かってほぼ一定の幅である。側面からみると先端が上方に反っている。断面形態は楕円形で、上部に切り込みがある（第7図－19・図版6－19）。17は須恵器筒形器台の筒状部の小片である。2条の突帯を巡らせ文様帯を区画している。文様は波状文を施し、長方形のスカシを開けている。外面に自然釉が認められる。17と同一個体と思われる。5世紀後半の時期に該当するものと考える（第7図－20・図版6－20）。21は青磁碗の小片である。線刻による蓮弁文を施している。14世紀の時期に該当するものと考える（第7図－21・図版7－21）。

★ 遺構出土遺物（第7～8図・図版5～7）

東側地区

1・4・5は落ち込み1上層から出土した遺物である。

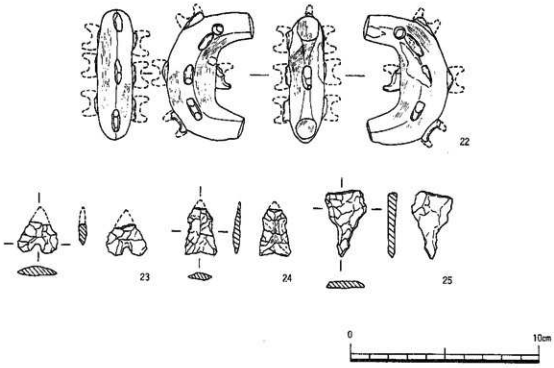
1は黒色土器A類碗の底部である。高台は高い断面三角形を呈する。内外面ともヘラミガキ・暗文などは施していない。9世紀後半（畿内系Ⅲ類）の時期に該当するものと考える（第7図－1・図版5－1）。4は土師器甕の小片である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は若干外傾した面をもつ。体部は内外面ともナデ調整を施し、特に頸部外面のナデは強い。体部外面に煤が付着している。9世紀前半の時期に該当するものと考える（第7図－4・図版5－4）。5は土師器甕の小片である。口縁部は大きく「く」の字状に外反し、端部は若干外傾した面をもち、外下方へつまみ出されている。体部は内外面ともナデ調整を施している。頸部外面に指頭痕が残っている。9世紀後半の時期に該当するものと考える（第7図－5・図版5－5）。

2・3は溝3から出土した遺物である。

2は土師器甕の口縁部の小片である。頸部に膨らみをもち、口縁部は外上方へ伸びる。端部は尖り気味に丸く納める。体部外面はハケメ調整・内面はナデ調整を施している（第7図－2・図版5－2）。3は土師器甕の口縁部の小片である。体部から大きく外上方へ屈曲し口縁部に至る。口縁端部は上方につまみ上げ外側に面を有する。この面には強いヨコナデ調整により段がついている。頸部外面に焦げ跡が認められる。9世紀前半の時期に該当するものと考える（第7図－3・図版5－3）。

6～10・22は落ち込み2から出土した遺物である。

6は須恵器坏身である。体部は内湾しながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。口縁端部は内傾する段を有する。体部外面は2／3程度回転ヘラケズリ後非常に丁寧なナデ調整・内面は板状工具によるナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。他の坏とは明らかに製作方法が違うものである。6世紀前半の時期に該当するものと考えておきたい（第7図－6・図版5－6）。7は須恵器坏身である。底部は丸味をもち、底部から外上方に開きながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは内傾する。口縁端部は内傾する若干の段を有する。体部外面は底部から2／3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第7図－7・図版5－7）。8は須恵器坏身である。底部は丸味をもち、底部から外上方に開きながら受部に至る。口縁部の立ち上がりは内傾する。口縁端部は内傾する段を有する。体部外面は底部から1／2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第7図－8・図版5－8）。9は須恵器坏蓋である。平坦な天井部から、内湾しながらやや外下方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部外面は天井部から2／3程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間は若干の稜線がみられ、口縁端部は内傾する凹面を有する。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第7図－9・図版5－9）。10は土師器把手付碗である。体部は、丸味をもつ底部から逆「ハ」の字状に大きく開き口縁部に至る。体部の片側の中位より若干上方に把手が付く。把手は、根元が幅広く先端に向かって狭くなり、先端は尖り気味である。側面からみると上方に大きく反っている。断面形態は楕円形である。6世紀前半に該当するものであると考える（第7図－10・図版5－10）。22は滑石製子持ち勾玉である。C字形を呈し、背に3個・両側面に3対6個・腹部に1個、計10個の突起が付くも




第8図　出土遺物

のである。頭部の孔は両側から開けている（第8図－22・図版7－22）。以上の他にこの遺構からは、直径約4～6㎜の滑石製臼玉26点（図版7-23）、厚さ約2㎜程の製塩土器片9片（図版7-24）が出土している。

**西側地区**

11～14は溝Aから出土した遺物である。

11は須恵器坏Bの蓋である。ほぼ水平な天井部から端部に至る形態である。天井部には擬宝珠つまみが付く。外面に降灰が認められる。8世紀後半の時期に該当するものと考える。上層から出土（第7図－11・図版6－11）。12は須恵器坏Bの高台の小片である。内外面ともナデ調整を施している。高台端部の接地面は斜めになっており、外端部のみが接地する形態である。上層から出土（第7図－12・図版6－12）。13は須恵器坏蓋である。平坦気味の天井部から、内湾しながら若干外下方へ開き気味に口縁部に至る形態。体部外面は天井部から1／2程度回転ヘラケズリ・内面は回転ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施している。体部と口縁部の間は沈線により若干の稜線がみられ、口縁端部は内傾する段を有する。外面に降灰が認められる。6世紀前半の時期に該当するものと考える（第7図－13・図版6－13）。

## 第4節 ま と め

今回の発掘調査では、古墳時代後期から中世にかけての遺構を検出した。しかし本文中でも述べたとおりほとんどの遺構において、出土する遺物が詳細な時期を判断するには困難な小片であったり、遺物を出土しないものであった。またそれぞれの時代で生活面の整地を繰り返したためか、同じ遺構面に時期の違う遺構が混在するという状況であった。

以下、簡単に整理しまとめにかえておきたい。

**古墳時代以前**

縄文時代の遺構は検出できなかったが、包含層からサヌカイト製打製石鏃2点・石錐1点・数多くのサヌカイト片が出土した。周辺の遺跡からも草創期の有舌尖頭器や中期～晩期の土器などが出土しており、付近においてこの時代の集落が存在していた可能性は大きいと考えられる。

**古墳時代**

この時期の遺構としては、東側地区で検出した落ち込み状遺構2があげられ、古墳時代後期前半に比定できると考える。この遺構からは須恵器や土師器とともに滑石製の子持ち勾玉1点・臼玉26点が出土している。また、これらと共伴して製塩土器片が9片出土している。このように滑石製品と製塩土器が伴って出土する状況は、四條畷市内の古墳時代の遺跡とくに中野遺跡周辺の特徴の一つとしてあげられる。第1章でも述べたが、中野遺跡は古墳時代中期から後期の大集落として周知されており、隣接する奈良井遺跡からはこの時期の蒙古系の小型馬を埋葬した祭祀遺構や石敷きの製塩炉を検出している。このように中野遺跡周辺においては、この時期に馬飼い集団が集落を営んでいたと考えている。今回の調査では馬に関する出土物はなかったが、この地区にもそれらの集団の集落が存在していた証左となるであろう。落ち込み状遺構1や溝Aに関しては、8世紀後半から9世紀には埋没しているが、遺物の出土状況からその開削時期を古墳時代後期前半と考えておきたい。

**中世以降**

西側地区で検出した多くの耕作溝がこの時期に属するものと考える。

以上、調査結果を簡単に述べてきた。今回は調査地区が狭いために遺構の詳細については不明な点が多く残った。それらについては、今後周辺地域の調査結果もかねて再検討することを課題としたい。

## 遺物観察表 (小石は$\phi$1～5㎜以内、砂粒はそれ以下とする)

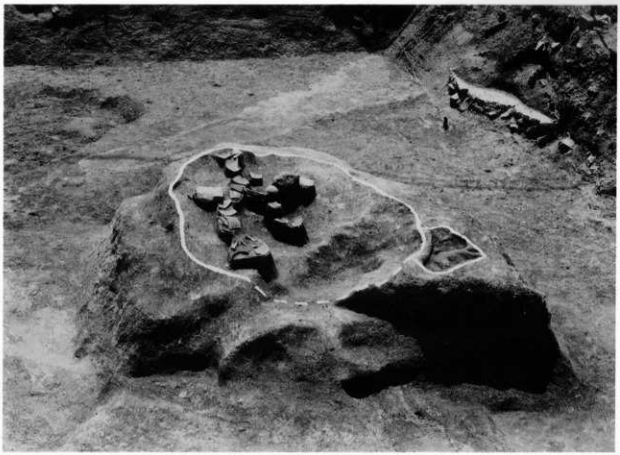
| 遺構名 | 種類 | 図号版号 挿番図番 | 器形 | 法量(cm) 口径 器高 底径 [推定]残存 | 色調 | 胎土 素質 砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 落込み1 | 黒色土器 | 7－1<br>5－1 | 碗 | －<br>(1.9)<br>6.2 | (外)橙色(5YR 7/8)<br>(内)暗灰色(N 3/) | 密<br>褐色粒子を少量含む | 底部のみ | A類 |
| 溝3 | 土師器 | 7－2<br>5－2 | 甕 | [13.0]<br>(4.6)<br>－ | 橙色<br>(7.5Y 7/6) | 砂粒を多く、金雲母を少量含む | 口縁のみ<br>1/4 | |
| | | 7－3<br>5－3 | 甕 | [24.4]<br>(7.7)<br>－ | 浅黄橙色<br>(10YR 8/4) | 砂粒を多く含む | 口縁のみ<br>1/5 | 外面に焦げ跡 |
| 落ち込み1 | 土師器 | 7－4<br>5－4 | 甕 | [10.6]<br>(3.5)<br>－ | 橙色<br>(5YR 6/6) | 砂粒を少量含む | 口縁のみ<br>小片 | 外面に煤付着 |
| | | 7－5<br>5－5 | 甕 | [17.2]<br>(4.5)<br>－ | 橙色<br>(5YR 7/6) | 砂粒を多く、小石・金雲母を少量含む | 口縁のみ<br>小片 | |
| 落ち込み2 | 須恵器 | 7－6<br>5－6 | 坏身 | [10.4]<br>(4.5)<br>－ | (外)暗灰色(N 3/)<br>(内)灰白色(N 8/) | 緻密 | 1/3 | |
| | | 7－7<br>5－7 | 坏身 | 13.4<br>4.5<br>－ | 灰色<br>(N 5/) | 砂粒・小石を多く含む | ほぼ完形 | |
| | | 7－8<br>5－8 | 坏身 | 13.4<br>4.9<br>－ | 灰白色<br>(5Y 7/1) | 砂粒・小石を多く含む | ほぼ完形 | 焼成不良 |
| | | 7－9<br>5－9 | 坏蓋 | [15.2]<br>4.6<br>－ | 灰色<br>(N 6) | 砂粒・小石を多く含む | 1/2 | |
| | 土師器 | 7－10<br>5－10 | 把手付碗 | 13.8<br>11.1<br>－ | 橙色<br>(5YR 7/6) | 砂粒・小石を多く、金雲母を少量含む | 2/3 | |
| 溝A | 須恵器 | 7－11<br>6－11 | 坏B蓋 | (12.0)<br>0.7<br>－ | 暗灰色<br>(N 3/) | 砂粒・小石を少量含む | 小片 | 外面に降灰 |

| 遺構名 | 種類 | 図版号<br>挿番<br>図番 | 器形 | 最大径(cm)<br>口径<br>器高<br>底径<br>[推定](残存) | 色調 | 胎土<br>素地<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 溝A | 須恵器 | 7－12<br>6－12 | 坏B | －<br>(1.9)<br>[11.4] | 灰色<br>(N 6/) | 密 | 高台のみ<br>1／4 | |
| | | 7－13<br>6－13 | 坏蓋 | [12.6]<br>(4.2)<br>－ | 灰白色<br>(7.5Y 7/1) | 砂粒・黒色粒子を多く含む | 1／4 | 外面に降灰 |
| | 土師器 | 7－14<br>6－14 | 把手 | 長：7.8<br>巾：5.3<br>厚：2.2 | にぶい橙色<br>(7.5YR 7/4) | 砂粒・小石を多く含む | | 上部に切込み |
| 包含層 | 須恵器 | 7－15<br>6－15 | 坏蓋 | [12.6]<br>4.1<br>－ | 灰白色<br>(N 7/) | 砂粒・黒色粒子を少量含む | 1／3 | |
| | | 7－16<br>6－16 | 坏蓋 | [12.8]<br>4.8<br>－ | (外)<br>灰色<br>(N 4/)<br>(内)<br>灰白色<br>(N 7/) | 密、黒色粒子を多く含む | 3／4 | 外面に降灰 |
| | | 7－17<br>6－17 | 器台 | －<br>(5.0)<br>[16.6] | (内・外)<br>暗灰色<br>(N 3/)<br>(断)<br>明赤灰色<br>(2.5YR 7/2) | 緻密 | 小片 | 外面に自然釉 |
| | 土師器 | 7－18<br>6－18 | 把手 | 長：5.0<br>巾：4.0<br>厚：1.8 | 橙色<br>(5YR 6/6) | 砂粒・小石を多く含む | | |
| | | 7－19<br>6－19 | 把手 | 長：6.4<br>巾：4.2<br>厚：(1.6) | 浅黄橙色<br>(7.5YR 8/3) | 砂粒・小石を多く含む | | 上部に切り込み |
| | 須恵器 | 7－20<br>6－20 | 器台 | －<br>(5.0)<br>－ | (内)<br>灰色<br>(N 4/)<br>(断)<br>明赤灰色<br>(2.5YR 6/1) | 緻密 | 小片 | 外面に自然釉 |
| | 青磁 | 7－21<br>7－21 | 碗 | | 緑灰色<br>(7.5GY 6/1) | 密 | 小片 | 線刻による蓮弁文 |
| 落込み2 | 石製品 | 8－22<br>7－22 | 子持勾玉 | 長：6.8<br>巾：3.5<br>厚：2.1 | 暗緑灰色<br>(10GY 3/1) | | | 滑石製 |

| 遺構名 | 種類 | 図号版号<br>押番図番 | 器形 | 法量(cm)<br>口径高径<br>器底径<br>[推定][残存] | 色調 | 土質<br>胎素<br>砂粒 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 包含層 | 石製品 | 8－23<br>7－23 | 打製石鏃 | 長：(1.7)<br>巾：2.1<br>厚：0.5 | | | 2／3 | サヌカイト製 |
| | | 8－24<br>7－24 | 打製石鏃 | 長：(2.5)<br>巾：1.7<br>厚：0.3 | | | ほぼ完形 | サヌカイト製 |
| | | 8－25<br>7－25 | 石錐 | 長：3.5<br>巾：2.0<br>厚：0.4 | | | 完形 | サヌカイト製<br>未完成品 |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

# 図　　版

四條畷小学校内遺跡



1．土　坑　1　　全　景（北から）

2．土坑1　遺物出土状況（北から）

1．第2遺構面検出全景　（東から）

2．B・C地区　全景（東から）

1．遺　構　全　景　　（南東から）

2．遺　構　全　景　　（東から）

1．遺　構　全　景　　（西から）

2．遺　構　全　景　　（西から）

# 図版5 C地区 井戸1

1．上 層

2．中 層

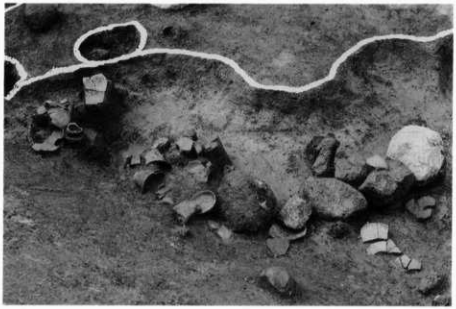
3．下 層

4．断 面

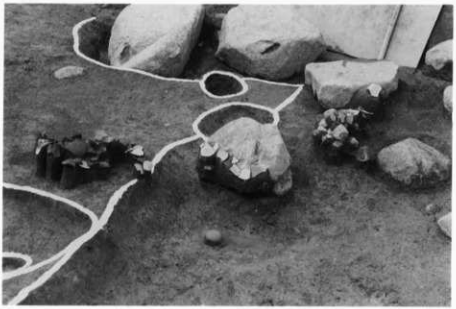
1．第3遺構面検出全景　（東から）

2．遺　構　全　景　　（東から）

図版7　B・C地区　遺物出土状況

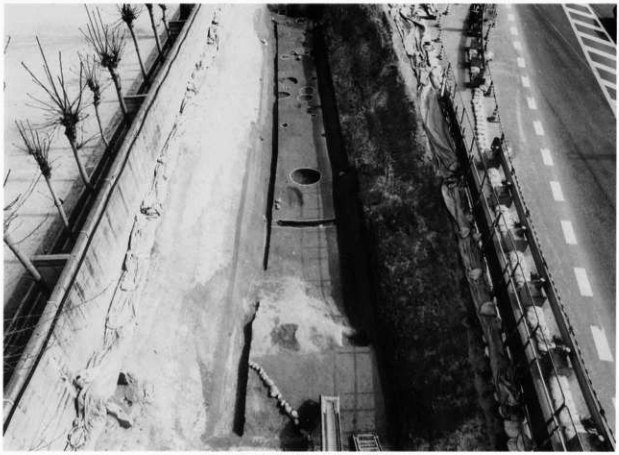


1．落込み状遺構6



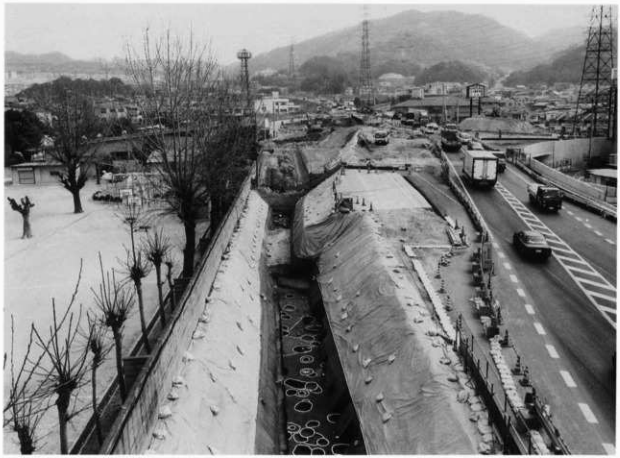
2．古墳周溝内及び周辺

3．古墳周溝内



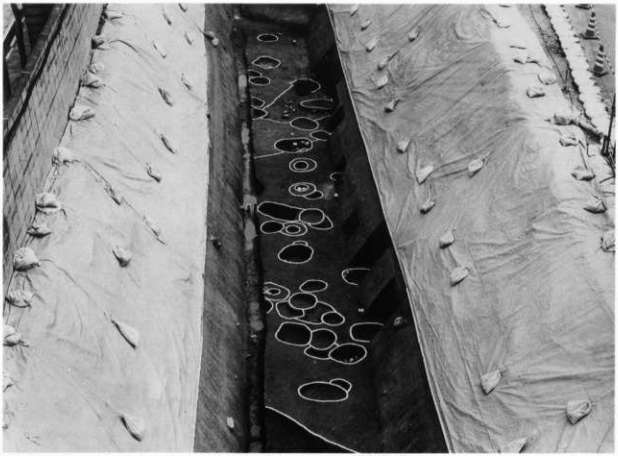
1．第1遺構面　全景（西から）

2．第2遺構面　全景（西から）

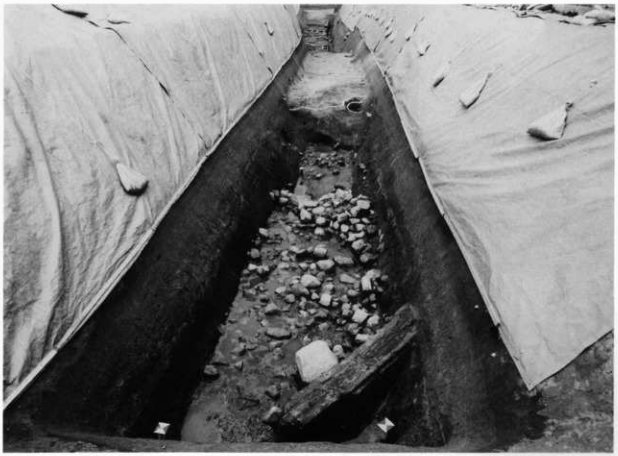


1．遺　構　全　景（西から）

2．遺　構　全　景（西から）



1．遺 構 全 景（西から）



2．旧 河 川 2 全 景（東から）

# 図版11　D地区　遺物出土状況

1．土坑54

2．土坑54

3．旧河川1

4．旧河川1

1

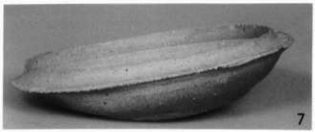
2

3

4

5

6


7

8

9

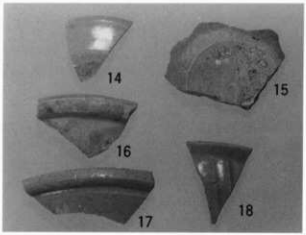
10

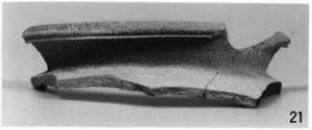
11

12

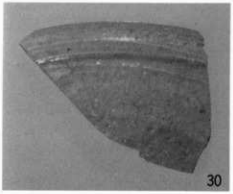
13

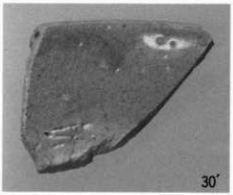
図版13　包含層出土遺物



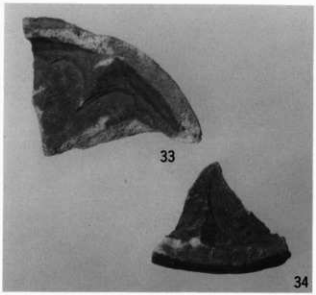


# 図版14 包含層・A地区出土遺物


30


30′

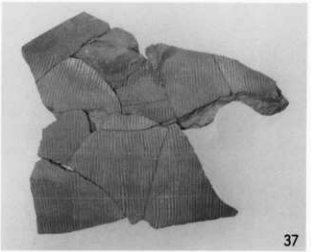
32 31

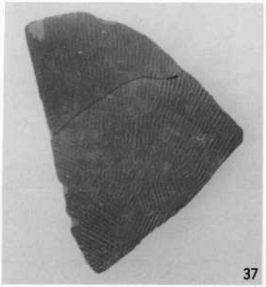

33 34

35

36

37

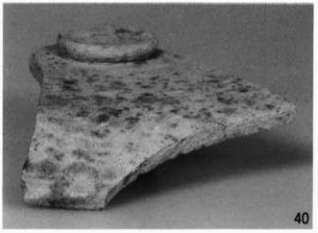

37

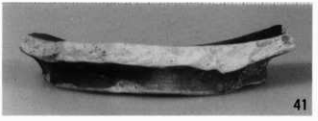

37

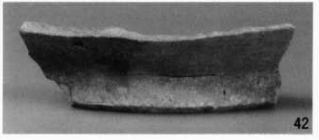
図版15 B・C地区 第2遺構面出土遺物

38

39


40

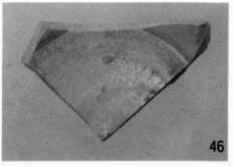

41

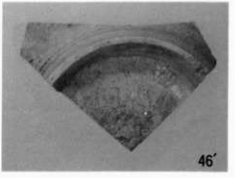

42

43

44

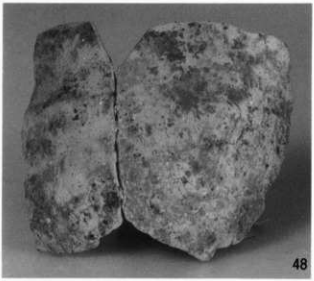
45


46


46′

47

# 図版16 B・C地区第3遺構面出土遺物


48

49

50

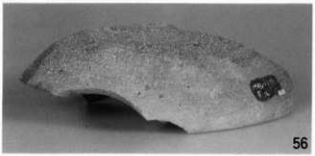
51

52

53

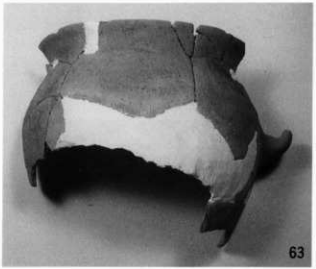
54

55


56

57

B・C地区



D 地 区

図版17 B・C地区 第3遺構面出土遺物・D地区 第1遺構面出土遺物

図版18　D地区　第2遺構面出土遺物

67

68

69

70

72

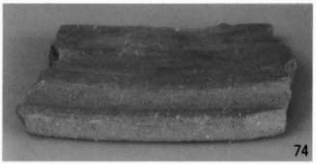
71

71′

71″

図版19　D地区　第2遺構面出土遺物

73


74

75

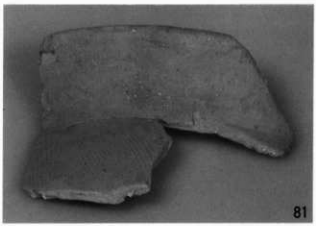
76

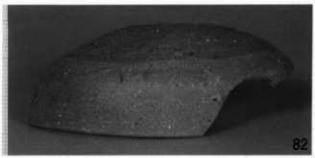
77

78

79

80


81


82

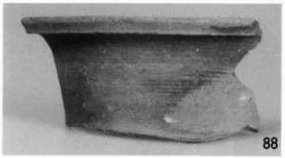
83

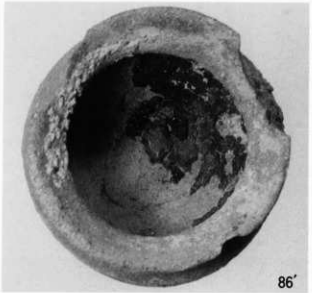
図版20　D地区　第2遺構面出土遺物

84

87

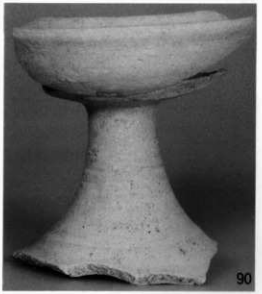
85


88


86′

89

86


90

図版21　D地区　第2遺構面出土遺物

91

93

92

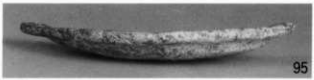
92′

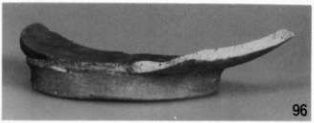
92″

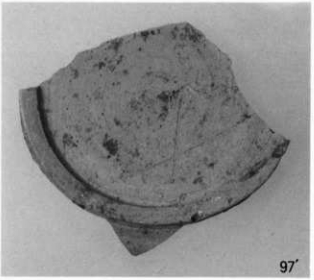
93′

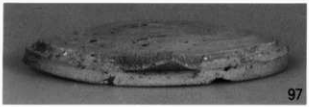
94′

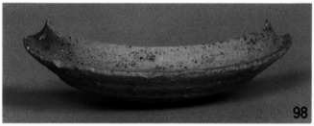
94


95

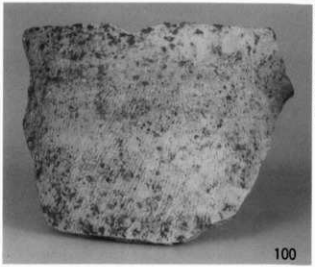

96

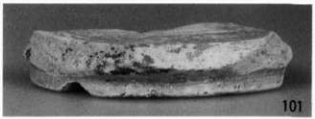

97'

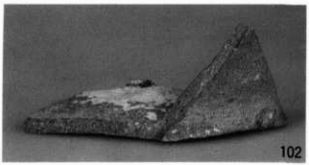

97

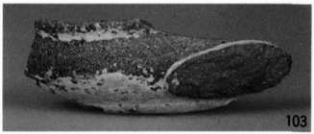

98

99

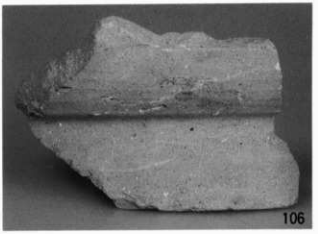

100

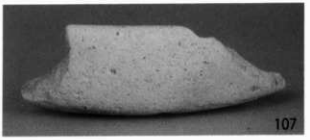

101


102

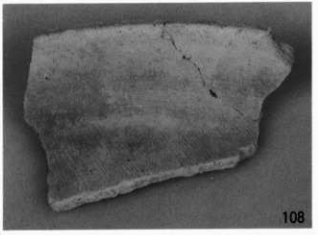

103

104′


106


107

104


108

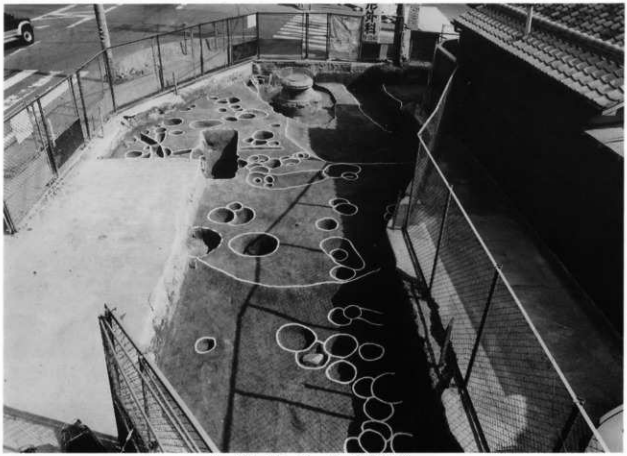
105

# 図　　版

中　野　遺　跡

1．遺構面検出全景（東から）

2．作業スナップ



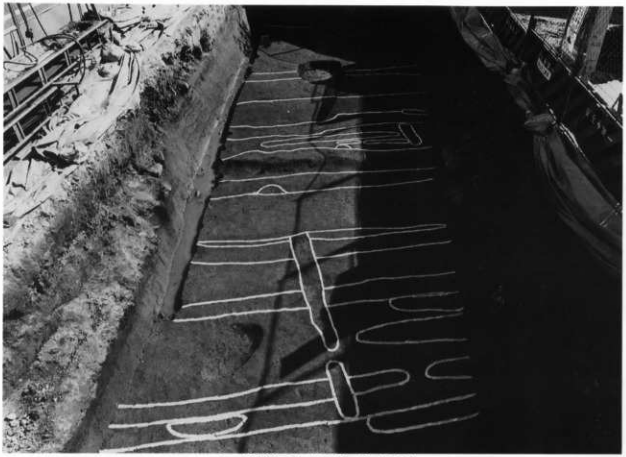
1．遺　構　全　景（西から）

2．遺　構　全　景（東から）

1．子持ち勾玉出土状況（東から）

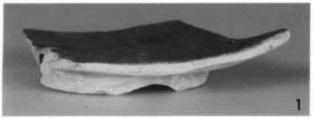
2．子持ち勾玉出土状況（北から）

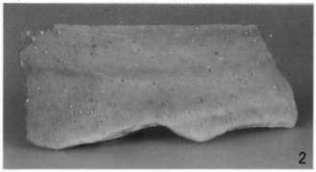
3．落込み状遺構2



1．遺構面検出全景（西から）

2．遺 構 全 景（西から）


1


2

3

4

5

6

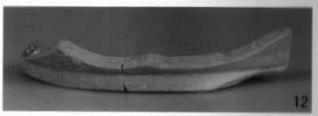
7

8

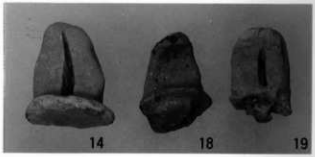
9

10

11


12

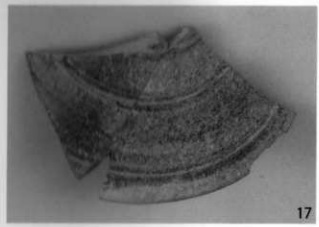
13


14
18
19

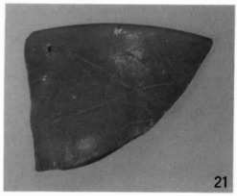
14′
18′
19′

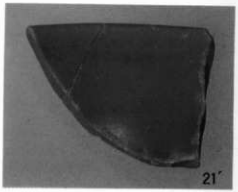
15

16


17

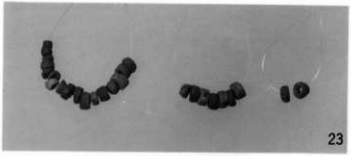
20


21


21′

22

22′


23

24

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | しじょうなわてしょうがっこうないいせき・なかのいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ |
| 書名 | 四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書 |
| 副書名 | |
| シリーズ名 | 四條畷市埋蔵文化財調査報告 |
| 編著者名 | 村上 始 |
| 編集機関 | 四條畷市教育委員会 |
| 所在地 | 〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 ☎072-877-2121 |
| 発行日 | 2000年（平成12年）3月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| しじょうなわてしょうがっこういんいせき<br>四條畷小学校内遺跡 | しじょうなわてしなかの・きよたき<br>四條畷市中野・清滝地内 | 272299 | 34°<br>44′<br>07″ | 135°<br>38′<br>56″ | 平成8年8月9日～<br>平成9年3月11日 | 1,478㎡ | 国道拡幅工事 |
| なかのいせき<br>中野遺跡 | しじょうなわてしなかの<br>四條畷市中野地内 | 272299 | 34°<br>44′<br>08″ | 135°<br>38′<br>48″ | 平成6年10月3日～<br>11月1日 | 226㎡ | 国道拡幅工事 |

| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 四條畷小学校内遺跡 | 集落<br>古墳 | 古墳時代～中世 | 古墳・Pit・土坑・落込み・旧河川・井戸・溝 | 須恵器・土師器・埴輪・土馬・磁器 | 方墳 |
| 中野遺跡 | 集落 | 古墳時代～中世 | Pit・土坑・落込み・溝 | 須恵器・土師器・子持ち勾玉・臼玉・製塩土器 | 子持ち勾玉 |

一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査
四條畷小学校内遺跡・中野遺跡
発掘調査概要報告書
平成12年3月発行
編集　四條畷市教育委員会
発行　四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1－1
印刷　加地企画印刷株式会社